

眼鏡下池北遺跡(IV)・西側遺跡(VI) ・西側古墓群(II)

—牛川西部土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財調査報告書—

2010年 2月

豊橋市教育委員会

豊橋市埋蔵文化財調査報告書第113集

め が ね し も い け ぎ た い せ ぎ
眼鏡下池北遺跡(IV)・西側遺跡(VI)
に し が わ こ ぼ ぐ ん
・西側古墓群(II)

—牛川西部土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財調査報告書—

2010年2月

豊橋市教育委員会



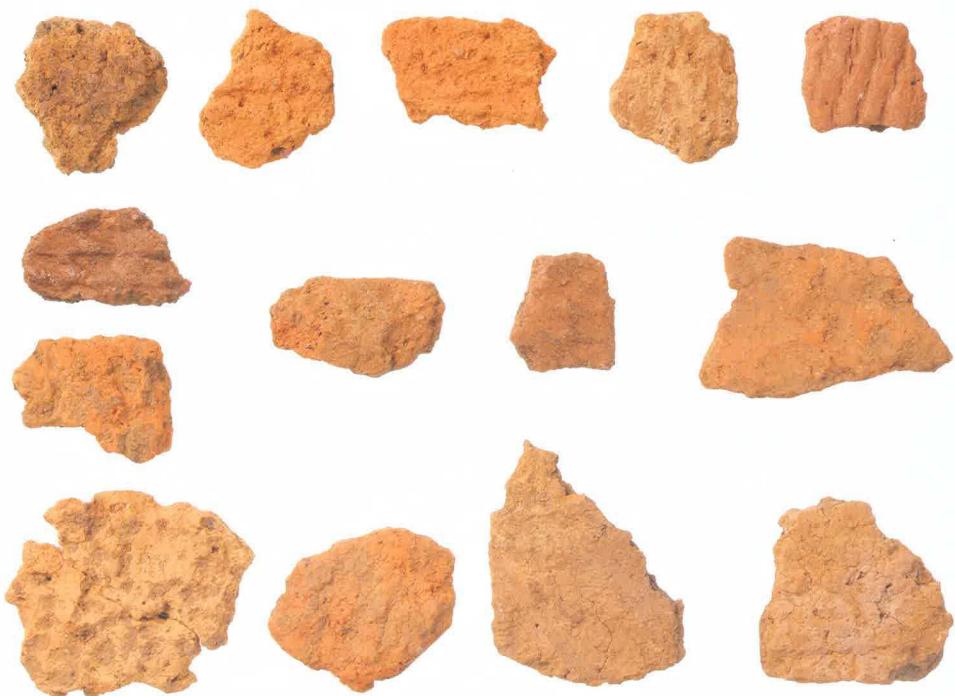
1. 調査地（西側遺跡）上空より石巻山を望む（西より）



2. 調査地（西側遺跡）上空より豊川を望む（東より）



3. 眼鏡下池北遺跡 B 地区 炉穴 002SK(南西より)



4. 眼鏡下池北遺跡 調査地内出土の縄文時代早期土器



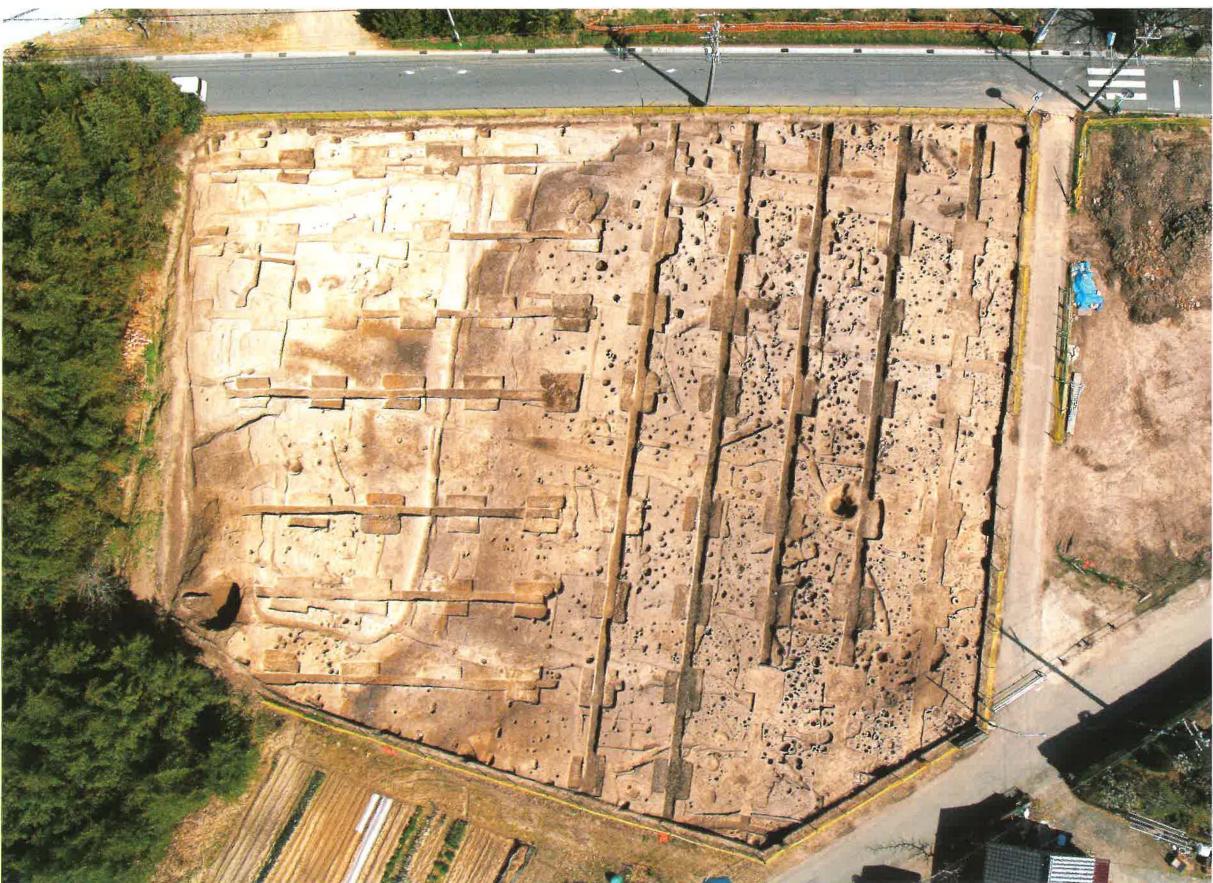
5. 西側遺跡 A1 地区 古墳時代の竪穴式建物群（東より）



6. 西側遺跡 A3 地区 弥生時代後期の環濠と古墳時代の竪穴式建物群（北より）



7. 西側遺跡 B1 地区 中世・近世の掘立柱式建物群（南より）



8. 西側遺跡 A4 地区 弥生時代中期の方形周溝墓群と古墳時代の竪穴式建物群（上空より）



9. 西側古墓群 A 地区 古墳時代前期の前方後方形周溝墓（上空より）



10. 西側古墓群 B 地区 近世の掘立柱式建物群（上空より）



11. 西側遺跡 A3 地区 弥生時代後期環濠 101SD 出土の土器群



12. 西側遺跡 A1 地区 弥生時代後期溝 266SD 出土の土器群

例　　言

1. 本書は、平成 20 年度に牛川西部土地区画整理組合が施工監理する、愛知県豊橋市牛川町字西側外において計画する土地区画整理事業に伴う事前調査として実施した、眼鏡下池北遺跡第IV次・西側遺跡第VI次・西側古墓群第II次の発掘調査報告書である。また、本書は豊橋市埋蔵文化財調査報告書第 113 集にあたる。
2. 発掘調査は、豊橋市教育委員会教育部美術博物館（以下、「市教委」という。）の指導の下、国際文化財株式会社西日本支店（以下、「国際文化財」という。）が、豊橋市より委託を受けて実施した。
3. 調査担当者は、指導を美術博物館小林久彦が、現地調査を主任調査員（兼現場代理人）辻 広志と調査員；坂野俊哉・町田義哉、調査補助員；栗木 寧・西野順二、測量技術者；櫻井 毅・渡邊 智が協力して行った。
4. 現地調査期間は、平成 20 年 6 月 2 日から平成 21 年 3 月 30 日まで実施した。

眼鏡下池北遺跡　　平成 20 年 10 月 15 日～平成 20 年 10 月 22 日

西側遺跡　　平成 20 年 6 月 2 日～平成 21 年 3 月 30 日

西側古墓群　　平成 20 年 11 月 20 日～平成 21 年 1 月 7 日

5. 整理調査期間は、平成 21 年 4 月 1 日から平成 22 年 2 月 25 日まで実施した。

6. 調査面積は 3 遺跡で 8,630 m² と、試掘調査 2 遺跡で 110 m² であった。

眼鏡下池北遺跡　　360 m²

西側遺跡　　6,380 m²

西側古墓群　　1,890 m²

西側古墓群（試掘）　　100 m²

中郷西遺跡（試掘）　　10 m²

7. 報告書の執筆は、第 3 章第 1 ～ 4・6 節を坂野俊哉が、第 5 節－1 をパレオ・ラボ AMS 年代測定グループ（伊藤茂・尾寄大真・丹生越子・廣田正史・小林紘一・Zaur Lomtadze・Ineza Jorjoliani・中村賢太郎）が、第 5 節－2 を高橋敦（パリノ・サーヴェイ株式会社）・遠部慎（北海道大学埋蔵文化財調査室）が、その他の章の執筆は、辻が行った。また、本書の編集は、小林久彦の指導の下に辻が行った。

8. 調査参加者及び協力者は、下記のとおりである。記して謝意を表したい。（敬称略・順不同）

中野一徹、花井晶子、小出豊、小川麻理、小竹晴夫、伊東里美、安田明己、三室昌世、井上佳子、補永享代、原田まり子、原田祥子、平賀静子、林令子、宮下喜美子、原田文雄、福田美智子、中野広志、森下直紀、矢野俊代、宮阪洋子、鳥居節子、鎌田美津子、服部房雄、山西和子、鈴木順子、小川孝祐、渡会哲二、杉浦恵子、及部幸枝、神藤宏、廣田才治郎、木村昭夫、福田和男、柴田敏孝、稻垣誠、伊藤寿和子、鈴木登久江、斎藤功、市川恵子、清原幸子、大山元男、白井忠、田嶋和義、岡田チエ子、三幣智安伎、関邦弘、小林寿夫、片桐紀之、田中武男、阿部實、寺坂繁、権田恒雄、兵藤伝寿、外山静香、樋口健、鈴木大輔、永谷純平、羽柴亜弥、世古翔大、小林政仁、中島啓太、上西窪安子、青嶋邦夫

遺跡全景写真の一部並びに遺物写真は、寿福写房が撮影した。

9. 現地調査及び整理期間中においては、下記の方々よりご指導ご教授をいただいた、記してお礼申し上げたい。（敬称略・順不同）

加藤賢二、西松賢一郎、丸山茂樹

凡　　例

1. 遺跡の略記号は、眼鏡下池北遺跡「MGN-K」に、西側遺跡「NSG」、西側古墓群「NGT」、中郷西遺跡「NGN」を用いた。
2. 本書に用いた座標は、平面直角座標（世界測地系）を用いた。なお、特に記さない限りmは省略した。
3. 水準は、東京湾平均海面の値を用いた。なお、特に記さない限りT.P.は省略した。
4. 調査グリットは、市教委の方式に合わせ、世界測地系の整数値による10m方格とし、任意の北西起点より東へアルファベット大文字に、南への数字を加えた2桁呼称とした。
5. 遺物の取り上げは、包含層等のグリット上げを除き、地区毎に1個体1番号を付して地点上げすることを基本として実施した。
6. 遺物の注記については、遺跡略記号、地区名、グリット名、遺構名、区画名、土層名、取上番号、取上日を基本とした。
7. 土色及び土器の色調については、『新版標準土色帖』(2000)を用いた。
8. 報告書掲載遺構の縮尺は、調査地全体は1/250を、平面図は1/120を、壁面図は1/60を、個別遺構や遺物出土状況等は1/30・1/40・1/60・1/80を基本とした。
9. 遺構番号は、遺跡の各地区に異なる3～4桁の数字の後ろに、SA(柵)、SB(建物)、SD(溝)、SE(井戸)、SK(土坑)、SU(集石遺構)、SX(不明遺構)、SZ(墳墓・周溝墓)、P(柱穴)等の遺構属性を付して遺構名とし、本来は「跡」を付さなければならない遺構であっても、本文中ではこれを省略した。また、「竪穴住居」・「掘立柱建物」・「土壙」の用語については、本書では建物様式の観点から「竪穴式建物」・「掘立柱式建物」とし、墓壙でないものは「土坑」を用いた。
10. 遺物番号は3桁で、眼鏡下池北遺跡では001～099までを、西側遺跡では100～969までを、西側古墓群では970～999までの番号を用いた。
11. 観察表の法量単位は、長さについてはcm(又はmm)を、重さについてはg(又はkg)を基本とした。
12. 出土遺物の縮尺は、土器・石製品は1/3を、玉製品と小型石器は1/1を基本とした。なお、一部の土器や石製品は1/4を使用した。
13. 遺物観察表の項目は、遺物番号、地区名、グリット名、遺構名、区画名、層位、取上番号、産地材質、器種、口径、器高、底径/台径、内面成形調整、外面成形調整、底部成形調整、胎土、焼成、色調、備考とした。
14. 遺物の年代、器種や器形の名称、部分名称等については、考古学で慣用的に使用されているものを用い、特に記さない場合は下記の文献を用いた。
 - ・田辺昭三(1981)『須恵器大成』角川書店
 - ・中村 浩(1981)『和泉陶邑窯の研究』雄山閣出版
 - ・尾野善裕(2001)「戊申年木簡」・尾張国分寺と猿投窯—猿投窯系須恵器編年の再構築・補論』『須恵器生産の出現から消滅』第5分冊、東海土器研究会
 - ・斎藤孝正(1989)「灰釉陶器の研究II」『名古屋大学文学部研究論集』104、名古屋大学文学部
 - ・小林久彦(1994)「東三河地域における古墳出土須恵器の編年」『東三河の横穴式石室』資料編、三河考古学談話会
 - ・加納俊介・石黒立人ほか(2002)『弥生土器の様式と編年(東海編)』木耳社

- ・赤塚次郎 (1992) 「山中式土器について」『山中遺跡』第 40 号、(財) 愛知県埋蔵文化財センター
- ・赤塚次郎 (1997) 「廻間 I ・ II 式再論」『西上免遺跡』第 40 号、pp13-32、(財) 愛知県埋蔵文化財センター
- ・赤塚次郎 (2001) 「松河戸・宇田様式の再編」『愛知県埋蔵文化財センター研究紀要』第 2 号、pp13-32、(財) 愛知県埋蔵文化財センター
- ・赤塚次郎 (2002) 「濃尾平野における弥生時代後期の土器編年」『八王子遺跡』第 42 号、pp25 — 47、(財) 愛知県埋蔵文化財センター
- ・北島大輔 (1998) 「桜林遺跡出土古式土師器の諸問題」『桜林遺跡』第 3 集、pp. 118 — 153、安城市教育委員会
- ・鈴木敏則 (1988) 「山中様式三河型（寄道様式）」『三河考古』創刊号
- ・鈴木敏則 (1996) 「三河の後期弥生土器の編年」『高井遺跡』豊橋市教育委員会
- ・贊元洋 (1990) 「欠山・元屋敷様式高坏の分類」『三河考古』3 号
- ・贊元洋 (1991) 「欠山・元屋敷様式高坏の分類（二）」『三河考古』4 号
- ・中世土器研究会編 (1995) 『概説中世の土器・陶磁器』真陽社
- ・大橋康二ほか (2000) 『九州陶磁の編年』九州近世陶磁学会
- ・藤澤良祐 (1993) 『瀬戸市史 陶磁史篇』4、瀬戸市
- ・藤澤良祐 (1994) 「山茶碗研究の現状と課題」『研究紀要』3、(財) 三重県埋蔵文化財センター
- ・藤澤良祐 (1998) 『瀬戸市史 陶磁史篇』6、瀬戸市
- ・藤澤良祐 (1998) 「近世瀬戸磁器編年の再検討」『植崎彰一先生古希記念論文集』植崎彰一先生古希記念論文集刊行会
- ・藤澤良祐 (2002) 「瀬戸・美濃大窯編年の再検討」『研究紀要』第 10 号、(財) 瀬戸市埋蔵文化財センター
- ・藤澤良祐 (2002) 『中世瀬戸窯の研究』高志書院
- ・藤澤良祐 (2005) 「施釉陶器生産技術の伝播」『中世窯業の諸相』
- ・中野晴久 (1994) 「生産地における編年について」『「中世常滑窯をおって」資料集』日本福祉大学知多半島総合研究所
- ・鈴木正貴ほか (1998) 「東海地方の土師器内耳鍋の生産について」『鍋と甕 そのデザイン』東海考古学フォーラム

本文目次

巻頭写真図版

例　　言

凡　　例

本文目次

第1章 遺跡の環境

1 調査地の位置と地形	1
2 調査地の遺跡と歴史	2

第2章 調査に至る経緯と経過

1 平成20年度の発掘調査	5
2 平成21年度の整理調査	7

第3章 眼鏡下池北遺跡（IV）

1 遺跡の立地と環境	9
2 調査方法と遺跡の構造	9
3 縄文時代の遺構と遺物	12
1) 遺構	12
2) 遺物	23
4 縄文時代以外の遺構と遺物	27
5 科学分析	30
1) 放射性炭素年代測定	30
2) 炭化材の樹種	34
6 小結	37

第4章 西側遺跡（VI）

1 これまでの調査	39
2 調査の経過と地区割の設定	39
3 A1地区	43
1) 基本層序	43
2) A1地区的遺構と遺物	44
4 A2・A7地区	70
1) 基本層序	70
2) A2・A7地区的遺構と遺物	70
5 A3地区	80
1) 基本層序	80
2) A3地区的遺構と遺物	80

6 A 4 地区	95
1) 基本層序	95
2) A 4 地区の遺構と遺物	95
7 B 地区	155
1) 基本層序	155
2) B 地区の遺構と遺物	159
8 C 地区	184
1) 基本層序	184
2) C 地区の遺構と遺物	184
9 小 結	192
1) 環濠の構築時期と廃絶時期	192
2) 弥生時代後期から 9 世紀までの竪穴式建物の変遷	192
3) 遺構の変遷	194

第 5 章 西側古墓群 (II)

1 これまでの調査	255
2 調査の経過と地区割の設定	255
3 A 地区	259
1) 基本層序	259
2) A 地区の遺構と遺物	259
4 B 地区	269
1) 基本層序	269
2) B 地区の遺構と遺物	269
5 小 結	305
1) 前方後方形周溝墓 110SZ	305
2) 古墓の土器	307
3) 近世の掘立柱式建物の変遷と評価	307

第 6 章 中郷西遺跡の試掘調査

1 これまでの調査と調査地の位置	312
2 遺構と遺物	312
3 小 結	312

第 7 章 総 括

1 今回の調査からみた課題	315
---------------	-----

遺物観察表	317～347
写真図版	1～86
抄録	
奥書	

挿 図 目 次

第1-1図 牛川西部地区位置図	1
第1-2図 牛川西部地区周辺地形図	2
第1-3図 牛川西部地区遺跡分布図	4
第2-1図 平成20年度牛川西部地区調査区位置図	5
第3-1図 調査区位置図	10
第3-2図 A・B地区壁面図	11
第3-3図 第2面平面図	13
第3-4図 002SK 遺構図・遺物実測図	14
第3-5図 009SK 遺構図・遺物実測図	14
第3-6図 010SK・012SK 遺構図・遺物実測図	15
第3-7図 014SK 遺構図・遺物実測図	16
第3-8図 019SK 遺構図	17
第3-9図 022SK 遺構図・遺物実測図	18
第3-10図 003SK・020SK 遺構図・遺物実測図	19
第3-11図 017SX 遺構図・遺物実測図	20
第3-12図 017SX 遺物実測図1	21
第3-13図 017SX 遺物実測図2	22
第3-14図 土器拓影図	24
第3-15図 石器実測図1	25
第3-16図 石器実測図2	26
第3-17図 第1面平面図	28
第3-18図 第1面 022SK 遺構図	29
第3-19図 縄文時代以外の遺物実測図	29
第3-20図 曆年較正結果	33
第4-1図 A地区調査区位置図	40
第4-2図 A1地区壁面図	41・42

第4-3図 A1地区遺構断面図1～3	45～47
第4-4図 A1地区平面図1～4	48～51
第4-5図 A1地区139SB・140SB・145SB・146SB・141SX・170SX遺構図1～5	55～59
第4-6図 A1地区掘立柱式建物1100SB遺構図	60
第4-7図 A1地区250SX・251SX・1030SK遺構図	64
第4-8図 A1地区195SK・302SK・303SK・1045SX遺構図	66
第4-9図 A1地区方形周溝墓状遺構1801SZ・1802SZ・1803SZ遺構図1・2	68・69
第4-10図 A2地区壁面図	71・72
第4-11図 A2・A7地区平面図1～4	74～77
第4-12図 A2地区015SB・017SA・009SE・101SD遺構図	78
第4-13図 A3地区壁面図	81
第4-14図 A3地区平面図	82
第4-15図 A3地区遺構断面図	83
第4-16図 A3地区001SB・002SB・003SB遺構図	85
第4-17図 A3地区004SB遺構図	87
第4-18図 A3地区005SB・006SB・007SB・107SX遺構図	89
第4-19図 A3・A7地区環濠101SD上層下層遺物出土状況図	91
第4-20図 環濠101SD土器分類図	93
第4-21図 A4地区壁面図	97・98
第4-22図 A4地区遺構断面図1～8	99～106
第4-23図 A4地区平面図1～7	107～114
第4-24図 A4地区1000SB・1001SB遺構図	115
第4-25図 A4地区1001SB・1002SB遺構図	116
第4-26図 A4地区1002SB遺構図	118
第4-27図 A4地区1003SB・1004SB・1005SB遺構図	120
第4-28図 A4地区1015SB・1022SB遺構図	121
第4-29図 A4地区1041SB・1081SB・1140SB遺構図	122
第4-30図 A4地区1141SB遺構図	124
第4-31図 A4地区1071SB・1150SB・1154SB・1070SB遺構図	125
第4-32図 A4地区1150SB・1152SB・1154SB・1159SB・1170SB遺構図	127
第4-33図 A4地区1150SB・1152SB・1159SB・1170SB遺構図	128
第4-34図 A4地区1082SB・1154SB・1155SB・2887SX遺構図	131
第4-35図 A4地区4301SB・4302SB遺構図	132
第4-36図 A4地区4303SB遺構図	134
第4-37図 A4地区4304SB遺構図	136
第4-38図 A4地区井戸1750SE遺構図	138

第 4-39 図 A 4 地区袋状土坑 058SK・1690SK・2560SK 遺構図	140
第 4-40 図 A 4 地区地下式坑 018SK 遺構図	142
第 4-41 図 A 4 地区 195SK・106SU・800SU・130P・1080P・1108P・1359P・1796SD・3555P 遺構図	144
第 4-42 図 A 4 地区 1200SZ・1700SZ・1800SZ・4214SZ 遺構図	151・152
第 4-43 図 B・C 地区調査区位置図	156
第 4-44 図 B 地区壁面図	157・158
第 4-45 図 B 地区遺構断面図 1～3	160～162
第 4-46 図 B 地区平面図 1～5	163～167
第 4-47 図 B 地区 206SB・2073SB 遺構図	168
第 4-48 図 B 地区 300SB・2000SB 遺構図	169
第 4-49 図 B 地区 301SB・1700SB 遺構図	171
第 4-50 図 B 地区 1970SB・2074SB 遺構図	173
第 4-51 図 B 地区 2075SB 遺構図	174
第 4-52 図 B 地区柱穴・318SK・325SK 遺構図 1～3	176～178
第 4-53 図 B 地区井戸 1100SE 遺構図	179
第 4-54 図 C 地区壁面図	185
第 4-55 図 C 地区遺構断面図	188
第 4-56 図 C 地区平面図 1・2	186・187
第 4-57 図 C 地区 037SK・060SK・070SK 遺構図	189
第 4-58 図 C 地区 200SK・280SK・340SK 遺構図	191
第 4-59 図 A 4 地区遺構変遷図 1～3	195・197・198
第 4-60 図 遺物実測図 1～54	201～254
第 5-1 図 第 1 次発掘調査平面図	255
第 5-2 図 調査区位置図	256
第 5-3 図 A 地区壁面図	257・258
第 5-4 図 A 地区平面図 1・2	260・261
第 5-5 図 A 地区遺物実測図	263
第 5-6 図 A 地区遺構断面図	265
第 5-7 図 A 地区前方後方形周溝墓 110SZ 推定復元図	267
第 5-8 図 B 地区遺構断面図	270
第 5-9 図 B 地区壁面図	271・272
第 5-10 図 B 地区平面図 1～4	273～276
第 5-11 図 B 地区遺物実測図	277
第 5-12 図 B 地区 664SB 遺構図	279
第 5-13 図 B 地区 665SB・666SA・667SA 遺構図	281
第 5-14 図 B 地区 668SB 遺構図	283

第 5-15 図	B 地区 669SB 遺構図	285
第 5-16 図	B 地区 671SB・672SA 遺構図	287
第 5-17 図	B 地区 673SB・674SA・675SA 遺構図	288
第 5-18 図	B 地区 677SB・678SA 遺構図	290
第 5-19 図	B 地区 676SB・679SA・680SB 遺構図	292
第 5-20 図	B 地区 681SB 遺構図	294
第 5-21 図	B 地区方形周溝墓 670SZ・方形周溝墓状遺構 682SZ 推定復元図	303
第 5-22 図	B 地区遺構変遷図	309
第 6-1 図	トレンチ位置図	313
第 6-2 図	平面図・壁面図	313

表 目 次

第 3-1 表	測定試料及び処理	30
第 3-2 表	放射性炭素年代測定及び暦年較正の結果	31
第 3-3 表	樹種同定結果	34
第 7-1 表	方形周溝墓一覧表	316
第 7-2 表	掘立柱式建物一覧表	316
第 7-3 表	堅穴式建物一覧表	317

写 真 目 次

写真 2-1	現地説明会の開催風景	8
写真 3-1	眼鏡下池北遺跡・西側遺跡の炭化材	36
写真 5-1	釜屋建民家と谷樋	311

第1章 遺跡の環境

1. 調査地の位置と地形

牛川西部地区の遺跡は、愛知県豊橋市牛川町字西側、字東側、字中郷、字洗島、字中郷に所在する、標高10～24m付近の左岸段丘上にある西側遺跡、東側遺跡、西側古墓群、眼鏡下池北遺跡、中郷遺跡、中郷西遺跡、洗島遺跡などからなる遺跡群である。

この牛川西部地区の遺跡が所在する河岸段丘は、牛川面と呼ばれる豊川下流域にみられる河岸段丘の中位面に属し、東三河を縦断する豊川下流の支流である神田川と朝倉川に挟まれた地区を指す。段丘の北側と南側は両河川の開析谷に、西側は豊川の比高が10～15mの明瞭な段丘崖に、東側は弓張山地の山麓斜面となっている。豊川の蛇行流路は、この牛川付近から東側寄りの段丘直下を流れ、吉田城下にあっては外堀の役目も果たしていた。牛川面の特徴は、扇状地性の堆積物が段丘上を覆っていることで、比較的大きな礫を含むシルト質の砂礫からなる土石流起源の堆積物かと考えられる。現在では牛川面は完全に段丘化しており、土砂の供給は全くなく浸食が進みつつある。

この牛川面において顕著な開析谷が、神田川と朝倉川の間にある眼鏡川である。眼鏡川は、台地の崖面から1.2km北東で谷が終わり、その上流では全く流路の痕跡を残さない。段丘内の雨水を伏流水として集め、湧き出して流れている。集落の立地は、この湧水地点である山麓の湧水地点と、段丘の端、沖積地を望む段丘上に村を形成している。このことは、時代の変遷があっても基本的に変わらない。

今回の調査は、第1-1図牛川西部地区位置図のこの内の西側遺跡、眼鏡下池北遺跡、西川古墓群の3遺跡と、試掘調査を行った中郷西遺跡の4遺跡で、第1-2図牛川西部地区周辺地形図に示したように何れも眼鏡川の両岸に所在する遺跡である。



第1-1図 牛川西部地区位置図

2. 調査地の遺跡と歴史

牛川西部地区の遺跡は、愛知県豊橋市牛川町に所在する1西側遺跡、6東側遺跡、5西側北遺跡、2西側古墓群、3眼鏡下池北遺跡、8中郷遺跡、4中郷西遺跡、7洗島遺跡などの遺跡からなる。第1-3図牛川西部地区遺跡分布図により周辺遺跡を概観してみたい。

旧石器時代は、約10万年前といわれる化石人骨「牛川人」が、約2km南東の石灰岩の牛川洞窟遺跡で発見されている。

縄文時代は、13おいほて遺跡、12浪ノ上遺跡、3眼鏡下池北遺跡で早期前半の押型文や晚期の土器が、1西側遺跡で前期中葉の北白川下層II式、中期前葉の大畠C2式、後期前葉の堀之内II式などが、8中



第1-2図 牛川西部地区周辺地形図

郷遺跡で中期前葉の船元II式・五領ヶ台式・大畠C2式、中期中葉の勝坂式・北屋敷式などが、7洗島遺跡や6東側遺跡で中期前葉の土器の出土が知られている。

弥生時代は、1西側遺跡で前期の条痕文土器や中期（長床式）～後期の土器の出土があり、3眼鏡下池北遺跡でも前期の条痕文土器や中期（長床式）の土器の出土がある。この他にも12浪ノ上遺跡、14西先原遺跡、6東田遺跡、11中野遺跡、15二連木城址、東郷遺跡などがある。

古墳時代は、古墳では方墳の19稻荷山古墳群1号墳と2号墳、素環頭大刀と土器を出した10浪ノ上1号墳、東田古墳は全長約40mの周辺では最も大きな前方後円墳、石枕が出土した11中野古墳などが知られている。他に方墳の7洗島1号墳、前方後方墳の可能性が残る5西側北1号墳と2号墳がある。集落としては、1西側遺跡、6東側遺跡、東郷遺跡がある。

奈良時代以降については、14西先原遺跡、1西側遺跡、6東側遺跡があり、古代末から中世になると平安時代末から室町時代の2西側古墓群、戦国期戸田氏のこの地域における拠点であった二連木城址、同じく戸田氏の牛川における拠点である10浪之上古屋敷址、近世窯である17牛川焼窯址などがある。

各遺跡の詳細については、これまでの既報告書に詳述されており参照されたい。

（参考文献）

- ・豊橋市史編纂委員会編（1973）『豊橋市史』第1巻、豊橋市
- ・久永春男（1982）「浪ノ上遺跡」『豊橋市埋蔵文化財発掘調査報告書第3集』豊橋市教育委員会
- ・久永春男（1983）『浪ノ上第1号墳調査概報』豊橋市教育委員会
- ・小林久彦（1991）『牛川西部地区遺跡範囲確認調査報告書』豊橋市埋蔵文化財調査報告書第12集、豊橋市教育委員会
- ・小林久彦（2006）『西側遺跡II-牛川西部土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財調査報告書-』豊橋市埋蔵文化財調査報告書第84集、豊橋市教育委員会
- ・岩瀬彰利（2007）『西側遺跡III-牛川西部土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書-』豊橋市埋蔵文化財調査報告書第89集、豊橋市教育委員会
- ・岩原剛（2009）「眼鏡下池北遺跡①・②」『洗島遺跡（II）・西側遺跡（IV）・眼鏡下池北遺跡（II）・中郷西遺跡（II）-牛川西部土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財調査報告書-』豊橋市埋蔵文化財調査報告書第107集、pp.62-74、豊橋市教育委員会



- | | | | | |
|------------|---------|------------|-------------------|------------|
| 1. 西側遺跡 | 6. 東側遺跡 | 11. 中野遺跡 | 16. 東田遺跡 | 21. 薬師寺遺跡 |
| 2. 西側古墓群 | 7. 洗島遺跡 | 12. 浪ノ上遺跡 | 17. 牛川焼窯址 | 22. 南牛川A遺跡 |
| 3. 眼鏡下池北遺跡 | 8. 中郷遺跡 | 13. おいひて遺跡 | 18. 田ノ上遺跡 | 23. 東先原遺跡 |
| 4. 中郷西遺跡 | 9. 熊野遺跡 | 14. 西先原遺跡 | 19. 稲荷山古墳群(1・2号墳) | 24. 西小鷹野遺跡 |
| 5. 西側北遺跡 | | 15. 二連木城址 | 20. 浪ノ上1号墳 | |

第1-3図 牛川西部地区遺跡分布図

第2章 調査に至る経緯と経過

1. 平成20年度の発掘調査

牛川西部地区の遺跡調査は、牛川西部地区画整理組合が施工監理する、愛知県豊橋市牛川町字西側外において計画する地区画整理事業に伴う遺跡の事前調査である。今回の平成20年度の調査は、眼鏡下池北遺跡が第IV次発掘調査、西側遺跡が第VI次発掘調査、西側古墓群が第II次発掘調査にあたる。各遺跡の調査区は、第2-1図 平成20年度牛川西部地区調査区位置図により示す。

発掘調査委託面積は、牛川西部地区内の本調査8,630m²と試掘調査110m²で、委託期間は、平成20年4月21日から平成21年3月31日であった。平成20年4月15日の入札で落札した国際航業株式会社（現・国際文化財株式会社）は、支店内に調査組織を編成し、実施計画を立案して準備作業



第2-1図 平成20年度牛川西部地区調査区位置図

に着手した。4月18日には、初回の打合せを行い、定期的な工程会議（毎週の市教委と国際文化財の2者会議と不定期な市区画整理課・組合・市教委・国際文化財の4者会議）、遺構検出時と調査完了時の検査、各調査範囲の確認と立会、作業員の新規雇用事務と作業時間・賃金、労働基準監督署への届出、周辺住民への周知、調査カ所の順番と作業工程、防護柵等安全施設の設置、現場事務所の設置位置と内容、測量に係る諸作業と既存データの借用、遺物の取上方法、遺構の掘削方法、写真撮影法と使用機材、遺跡・遺構の略記号・記載方法、文化財保護法上の手続き、納品物の内容と体裁、提出書類の書式などの確認を行った。以後、定期打合せは現地調査終了までに42回実施した。

現地調査は、6月2日の作業員の入場者講習に始まり、西側遺跡A1地区より着手した。

西側遺跡A1地区(870m²)は、6月4日に重機による表土掘削を開始し、弥生後期の溝や土坑、古墳中期の竪穴式建物4棟、大型の桁行7間以上の建物などを調査し、途中中断を挟んで8月2日に終了した。

西側遺跡A3地区(280m²)は、6月17日に表土掘削を開始し、弥生後期の環濠1条や古墳中期・後期の竪穴式住居跡7棟、近現代の区画溝等を調査して、7月18日に終了した。

西側遺跡C1地区(410m²)は、7月9日に表土掘削を開始し、弥生後期の土坑5基、近現代の区画溝等を調査して、7月28日に終了した。A1・A3・C1地区は、8月21日にプロカメラマンによる撮影を、8月22日にはラジコン撮影を実施して終了した。

西側遺跡A2地区(1,200m²)は、8月26日に表土掘削を開始し、攪乱が多かったがA3地区の弥生後期環濠1条の延長部分等を調査して、9月5日に終了した。

西側遺跡B1地区(490m²)は、9月9日に表土掘削を開始し、中世から近世の溝や掘立柱式建物を調査して、10月21日に終了した。A2・B1地区は、10月10日にプロカメラマンによる撮影とラジコン撮影の第2回目を実施して終了した。

今回の西側遺跡の調査は、当初計画では西側遺跡A地区はA1地区～A6地区が予定されていたが、A6区については土地所有者の合意が得られず、作業工程や調査地点を変更する必要が生じた。

西側古墓群の試掘調査(100m²)は、9月25日と27日に合計7本のトレーンチ調査を実施し、A地区では北側に土坑や溝が、B地区では柱穴や溝が全面で検出され、A地区の北側とB地区が要調査対象地域となった。この結果を受けて、西側遺跡で当初面積が不足している分を、4者協議を行い僅かではあるが西側古墓群の調査をすることで補うことになった。

眼鏡下池北遺跡(360m²)は、10月14日から工事関係者によるアスファルトの撤去が始まり、翌日より調査を開始して10月20日にはA地区の2面の調査を終了し、10月22日には縄文早期の炉穴や集石炉などの2面目の遺構を調査してB地区も終了した。

中郷西遺跡の試掘調査(10m²)は、11月4日と6日に実施し、近現代の土壙墓2基を検出した。

豊橋市の水道敷用地(道路敷)である西側遺跡A7地区(100m²)は、幅5.1m×長さ20mの用地部分について調査を行った。上下水道局・警察等の申請許可を得て、10月13日より終了したA2地区側に仮設の道路(通学路)を造成して付け替えを行い、安全対策を講じて準備を完了した。調査は11月4日より開始し、11月11日には環濠の一部が残存する用地内の調査を終了した。その後、復旧工事を12月20日に終了した。

西側遺跡B 2地区(570 m²)は、11月17日に表土掘削を開始し、古代の竪穴式建物、中世から近世の溝・井戸や掘立柱式建物、多数の柱穴を調査して、1月27日に終了した。

西側古墓群(1,890 m²)は、11月20日よりA地区とB地区の表土掘削に入り、前方後方形周溝墓や近世の掘立柱式建物群を調査し、終了したのは12月22日であった。西側古墓群は、12月24日にラジコン撮影を、1月7日にプロカメラマンによる撮影の第3回目を実施して終了した。

西側遺跡A 4地区(2,460 m²)は、12月23日より梨や生垣の伐根と持ち出し処分を開始し、準備が12月25日には終了した。調査は1月8日より開始し、縄文早期の竪穴式建物1棟、条痕文期の袋状土坑4基、弥生中期の方形周溝墓3基、古墳時代の竪穴式建物、中世の地下式坑1基、近世の区画溝や井戸、掘立柱式建物など多数を調査して3月21日に終了した。西側遺跡A 4地区は、3月24日にプロカメラマンによる撮影とラジコン撮影の第4回目を実施して終了した。

その後、全ての埋め戻しと撤去作業を終了したのは、3月30日であった。

なお、平成21年3月20日(春分の日)には、西側遺跡A 4地区を中心とした遺跡現地説明会を市教委・国際文化財が開催し、約150名の参加があった。

2. 平成21年度の整理調査

牛川西部地区遺跡の整理調査は、現地調査時の1次整理(洗浄・注記)を終了している遺物コンテナ115箱(遺物袋4,573袋)について実施した。委託期間は、平成21年4月1日から平成22年2月26日である。整理調査は、整理作業員の新規雇用に引き続いで、4月6日に入場者講習を行い整理調査に着手した。

遺物整理の作業内容は、①一次選択(分類)は、遺跡・地区・遺構毎に遺構の性格を特徴付ける遺物、年代を示す遺物から各遺構の年代と性格を確定し、重要と思われる遺物や貴重と思われる遺物・石・金属・骨・炭化物等を選択した。抜き出した遺物は、遺物抜き出し台帳に記載し別保管した。②二次選択(分類)は、一次選択の中から接合・復元や実測の必要な遺物を二次選択した。③C14年代測定は、年代測定が必要な遺構や遺物で測定試料のあるもの5点について、市教委と協議し市教委が直接測定委託して実施することとなった。④樹種同定は、市教委の直接委託により4点を実施した。結果は本報告書に掲載した。⑤接合・復元は、二次選択された遺物を接着剤による接合と実測や写真に必要な範囲で石膏復元を行った。⑥遺物実測は、デバイダー・三角定規・L定規・真弧等で原寸実測を875点行い、遺物観察項目に従い観察表を作成した。⑦遺物のトレースは、実測遺物を各図版の縮率に合わせて一次縮小しトレースした。⑧遺物実測図版割付は、遺構毎にトレース済みの遺物の図版用割付を編集ソフトを用いて行った。⑨遺物写真撮影は、実測遺物の中で、重要な遺物をプロカメラマンにより写真撮影を行った。⑩遺物写真図版割付は、遺物写真の図版用割付編集ソフトを用いて行った。⑪遺物観察表作成は、図版掲載遺物の遺物観察表を作成した。⑫図版毎の遺物保管は、図版毎に遺物をコンテナ30箱に別保管とした。

遺構図面整理の作業内容は、①遺構平面図断面図の整理は、遺跡・地区・遺構毎に各遺構の分析を行い、報告書作成に必要な図面の整理を行った。②遺構のトレースは、報告書の図版を考慮して遺構のトレースを行った。③遺構写真図版割付は、遺構写真を図版用に割り付けし、遺構写真図版を作成

した。

原稿作成と印刷の作業内容は、①原稿の作成は、遺構と遺物の整理調査により明らかとなつた内容を記載して、報告書の原稿を作成した。②編集と校閲は、原稿、挿図、観察表、実測図版、遺構図版、遺物写真図版、遺構写真図版等の編集を行い、印刷原稿を作成した。また、印刷原稿を市教委に提出し校閲を受けた。③印刷の発注は、印刷原稿で印刷業者を決定し印刷を発注した。④校正と刊行は、校正は3回行い、校正終了後に印刷刊行した。

刊行後の図面・遺物の整備は、①刊行後の図面の整備では、刊行に使用した図面や写真のデータ整備を行った。②刊行後の遺物の整備では、刊行に使用した遺物の整理を行い、コンテナ145箱に再整理した。遺物抜き出し台帳6冊、遺物実測図台帳6冊、遺物写真アルバム1冊、実績報告・調査日誌・打合せ簿・作業写真等一式の整理を行った。

最終検査は、2月26日に実施され、納品を行い終了した。



写真2-1 現地説明会の開催風景

第3章 眼鏡下池北遺跡（IV）

1. 遺跡の立地と環境

眼鏡下池北遺跡は、豊川左岸の標高 20 m 前後の中位段丘面に存在する。

西に向かって緩やかな傾斜をみせるこの段丘面縁辺部は、眼鏡川や朝倉川など西流する小規模河川によって浸食開析されており、それらの河川両岸には極めて小規模な段丘面がみられる。

眼鏡川は全長 1 km ほどで、開析谷頭の湧水点である眼鏡上池と眼鏡下池を源流とする水流だが、かつては水流を堰き止めて上下二段に農業用の溜め池としていた。今は埋め立てられてしまつて存在しないこれらの池が、遺跡名の由来となっている。

豊川左岸の段丘面は、その縁辺部を中心として各時代の遺跡が集中する地域である。

眼鏡下池北遺跡では過去の調査においても、縄文時代早期前半に属する堅穴式建物や、多くの炉穴が発見されている。ほぼ同時期の遺跡としては、押型文土器を出土する浪ノ上遺跡が東北側に隣接して存在する。また、西側北遺跡からは前期の土器や遺構が発見されているが、他には中期や晚期の遺物が散漫に発見されている程度で、縄文時代の他の時期の大規模な遺跡は、確認されていない。

出土する遺物に見る限り、眼鏡下池北遺跡と浪ノ上遺跡は一連の遺跡である可能性が高く、縄文時代早期前葉には東西約 500 m 余にも及ぶ範囲の段丘面で生活が営まれていた可能性がある。

今回の調査範囲では、出土した遺物などの様相から、遺跡の所属する時期は下層が縄文時代早期前葉に、上層が部分的に江戸時代を中心とした近世に属するものと考えられるが、過去の調査では弥生時代中期の住居址や古代の遺物も発見されている。

2. 調査方法と遺跡の構造

今回の調査範囲は、第 3-1 図調査区位置図に示す現状が市街地の道路として供用されていた道路敷部分（以下「A 地区」という。）と、私有地部分（以下「B 地区」という。）に大別できる。

いずれの地区も、試掘データや過去の調査データを参考に、重機によって表土掘削を行ったのち、国土座標に準拠して 10 m 四方の調査グリッドを設定。以後、人力によって遺構検出や掘削を行った。

調査区は、複数の時代の遺構が重複することを想定し、表土掘削後の遺構検出面を第 1 面とし、以下地山を検出面とする遺構を第 2 面検出と便宜的に想定して調査を進めたが、A 地区では第 1 面で全ての遺構が検出され、また B 地区では激しい搅乱により全ての遺構が地山面である第 2 面検出という結果となつた。

うち B 地区は、かつて梨園が営まれていた時の搅乱（主に重機による抜根痕）が激しく、ほぼ全面に亘り A 地区でみられたような第 1 面に相当する安定した遺構面は存在しなかつた。ただ、本来は排水溝のような何らかの機能を持って連続していたであろう複数の溝（045SD ~ 049SD、054SD）などは A 地区に集中する江戸期の遺構に関連したもののが残る可能性もある。

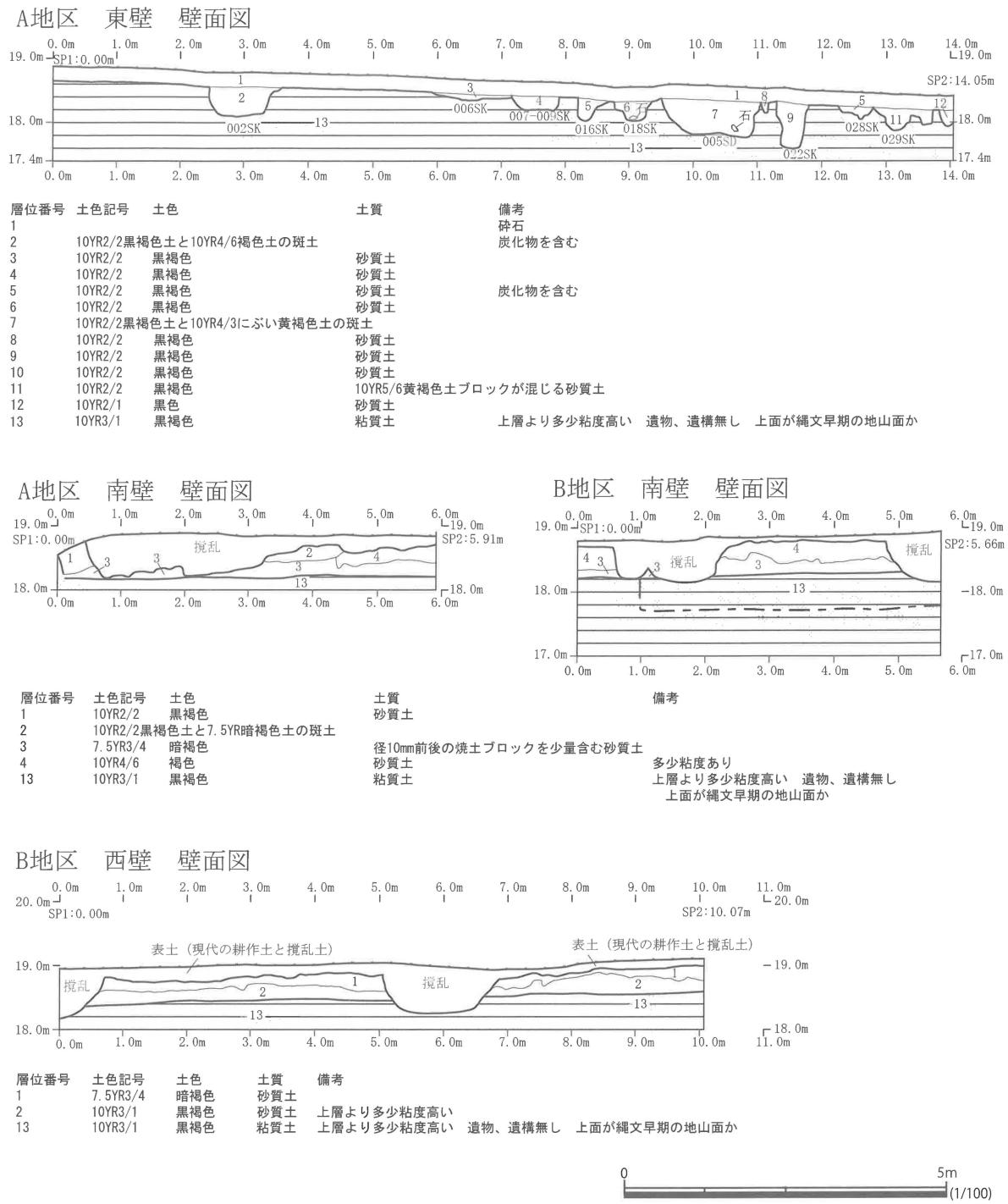
B 地区では重機や人力で搅乱土を除去すると、直ちに地山面から縄文時代早期の炉穴や地山を検出する場合がほとんどであった。



第3-1図 調査区位置図

また、A地区に見られた遺構のほとんどは近世の所産で、柱穴や土坑、溝などが検出された。道路幅は4mほどであったが、水道やガス管などの埋設搅乱によって実際に遺構が残っていた部分は幅1.5m、全長14mほどの範囲に限られていた。また、遺構の検出状況としては、道路の舗装工事で既に遺物包含層の大半が削平を受けていたことから、舗装アスファルト下に敷かれた碎石層を除去すると直ちに、地山及び遺構検出面が出現するという状況であった。

なお、B地区は19.5m×10mほどの調査面積が確保されたが、こちらでは明確な近世の遺構は検



第3-2図 A・B地区壁面図

出されなかつたことから、近世の遺構ははつきりとした区画を有して存在する可能性が指摘できる。

B地区の堆積状況は、第3-2図A・B地区壁面図に示した通りであるが、ほぼ全面に広がる搅乱層直下に存在する黒褐色または褐色のやや粘性を有する砂質土が縄文時代早期の遺物を含む包含層である。ほとんどの遺構は、地山層である13層黒褐色粘質土上面にて検出された。

3. 縄文時代の遺構と遺物

縄文時代の遺構と確認されたものは、第3-3図第2面平面図の土坑と炉穴、そして炉穴床面や壁部の残欠と考えられる焼土塊や焼土面が大半を占める。ここでは、平面プランと最低限の断面形状を検出することができた炉穴を図示しながら、記述を進めたい。

なお、炉穴の形状分類は岩瀬彰利氏の分類を踏襲し、分類記号もそれに準ずる（岩瀬2008）。

A地区で検出された遺構の大半は江戸時代以降のものであったが、地山面深くまで掘削された柱穴や土坑の断面には、縄文時代早期の炉穴や焼土面の残欠と思われるものが数カ所で確認された。うち、唯一面的な広がりでその規模が確認されたものが004FPで、中央は江戸時代の溝005SDによって消失しているが、焼土塊の広がりは0.76m×0.47mの不整形な形状で広がっていた。焼土塊の残存状況から、縄文時代早期の炉穴残欠であると思われる。

B地区にはその北半の東西に並ぶように炉穴が展開するが、一部のものは切り合ったり、隣接したり、または重複して存在していた。

1) 遺構

A. 炉穴と集石炉

002SK（巻頭写真3、第3-4図002SK遺構図・遺物実測図）

平面プランが細長い二等辺三角形を呈する所謂東海型炉穴（1類）と、集石炉の重複した遺構である。煙道部に相当する部分は道路側溝と小さな攪乱で壊されていたが、残存した全長1.4m、焚き口付近の最大幅約0.66m（被熱範囲）で、床面は煙道部に向かって緩やかに下り傾斜をみせる。いちばん狭まった部分の断面形状は直径約0.3mの円形を呈し、天井部分は崩落していたが側壁はよく残っていた。床面直上からは土器片と思われるものを8片ほど採取したが、いずれも小片で極めて保存が悪く、拓影図などを示すことのできるものはなかった。

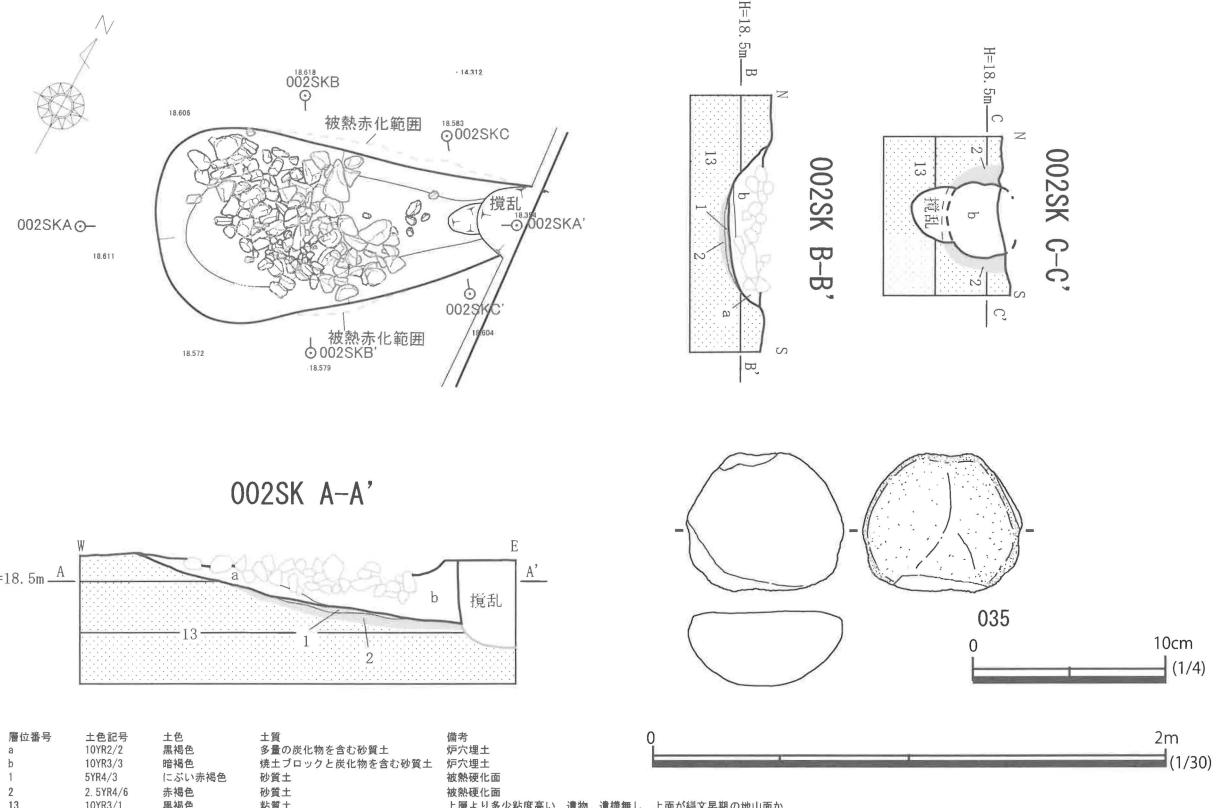
また、焚き口周辺に被熱礫の集石がみられ、検出当初は集石炉ではないかと考えたほどである。集積範囲は1.7m×1.2mほどで、東西にやや細長く、炉穴の主軸とは異なる。採集された被熱礫の総重量は145.3kgに達するが、その堆積断面の観察から、炉穴本体の使用が放棄された後に焚き口周辺の窪地を利用して集石炉を営んだものと考えられる。取り上げた被熱礫を精査した結果、1点のみ磨石として使用された可能性の高い礫035を発見した。断面形状は半月形で、被熱による表面劣化によって顕著な摩耗痕はほとんど見出せなかつたが、その形状等から石器であった可能性が高い。また平面形状に見られるように、上下に弱く抉られた痕跡も観察できることから、錘的な使用方法も考慮すべきかも知れない。

なお、焚き口床面で採取された炭化物の年代測定の結果、9490±30BPという数値が得られており、土器型式などから推定されていた早期前葉と符合する。分析結果の詳細は、次節を参照されたい。

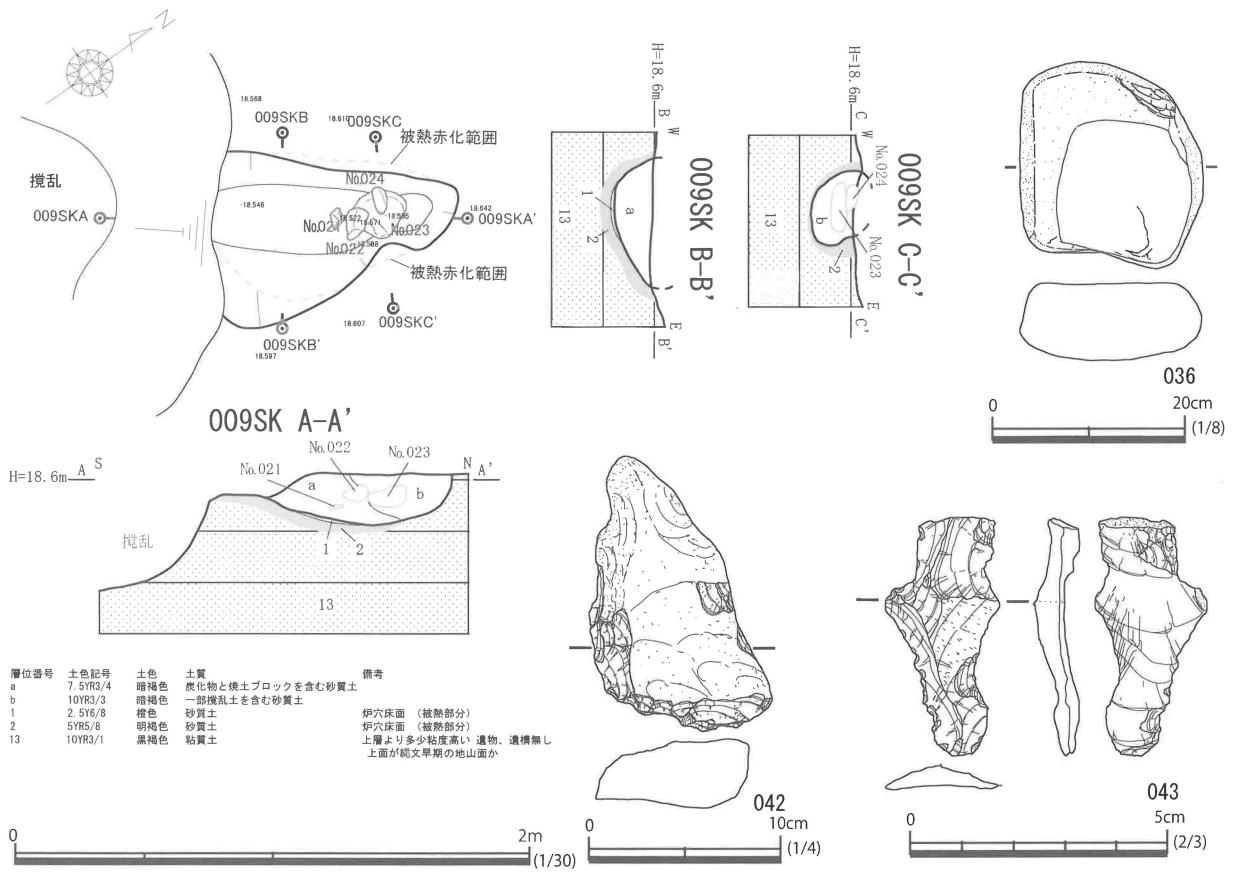
009SK（第3-5図009SK遺構図・遺物実測図）

やや不規則な平面プランを有する炉穴であるが、基本的には二等辺三角形プランをもつ1類と考え





第3-4図 002SK 遺構図・遺物実測図



第3-5図 009SK 遺構図・遺物実測図

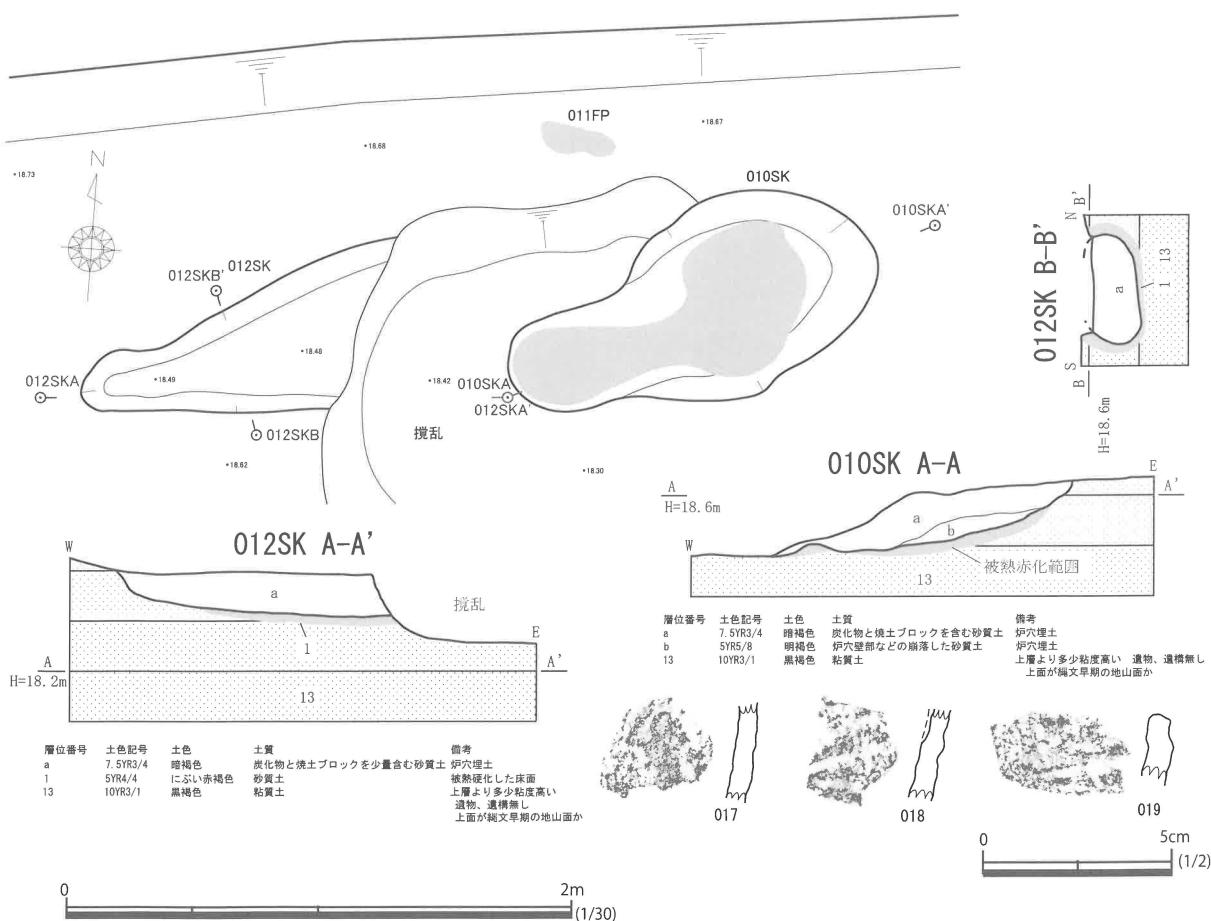
てよいだろう。焚き口部分は攪乱によって大きく抉られているために正確な全長は不明であるが、残存部の長さ 0.94 m、最大幅 0.64 m で、煙道部に近い狭まった部分では、天井部は落下していたが、湾曲した側壁がよく残っていた。

平面プランがやや括れた煙道部の手前には、石皿状の平板石や石核、剥片などが詰め置かれたような状況で出土した。これら大小 4 個の石に被熱の痕跡は見られず、炉穴床面よりも 0.1 m ほど上位で検出されたことなどから、炉穴使用終了後の儀式的な埋納行為によって残された遺物ではないかとも推測される。

010SK（第3-6図 010SK・012SK 遺構図・遺物実測図）

010SK は攪乱によって遺構上部が失われていたが、緩やかに床面が下り傾斜をみせる炉穴の残欠である。特徴的なのは床面最奥と思われる部分が僅かに盛り上がっていることで、先の 022SK と同様の断面形状を考えることもできるが、周囲の土層の保存状態が悪いので、別遺構の重複である可能性もある。

よく被熱し赤化した床面からは 3 片の土器を検出したが、いずれも小片で保存状態が極めて悪いものの、早期前葉の撚糸文土器であると思われる。



第3-6図 010SK・012SK 遺構図・遺物実測図

012SK (第3-6図 010SK・012SK 遺構図・遺物実測図)

012SKは1類の平面形を持つ炉穴の残欠だが、床面は水平部分が多い。焚き口部分が搅乱によって消失しているが、残存部分の長さは1.12mを測り、比較的長大な全長を持っていたことが推定される。全体的に顕著な被熱痕はみられない。

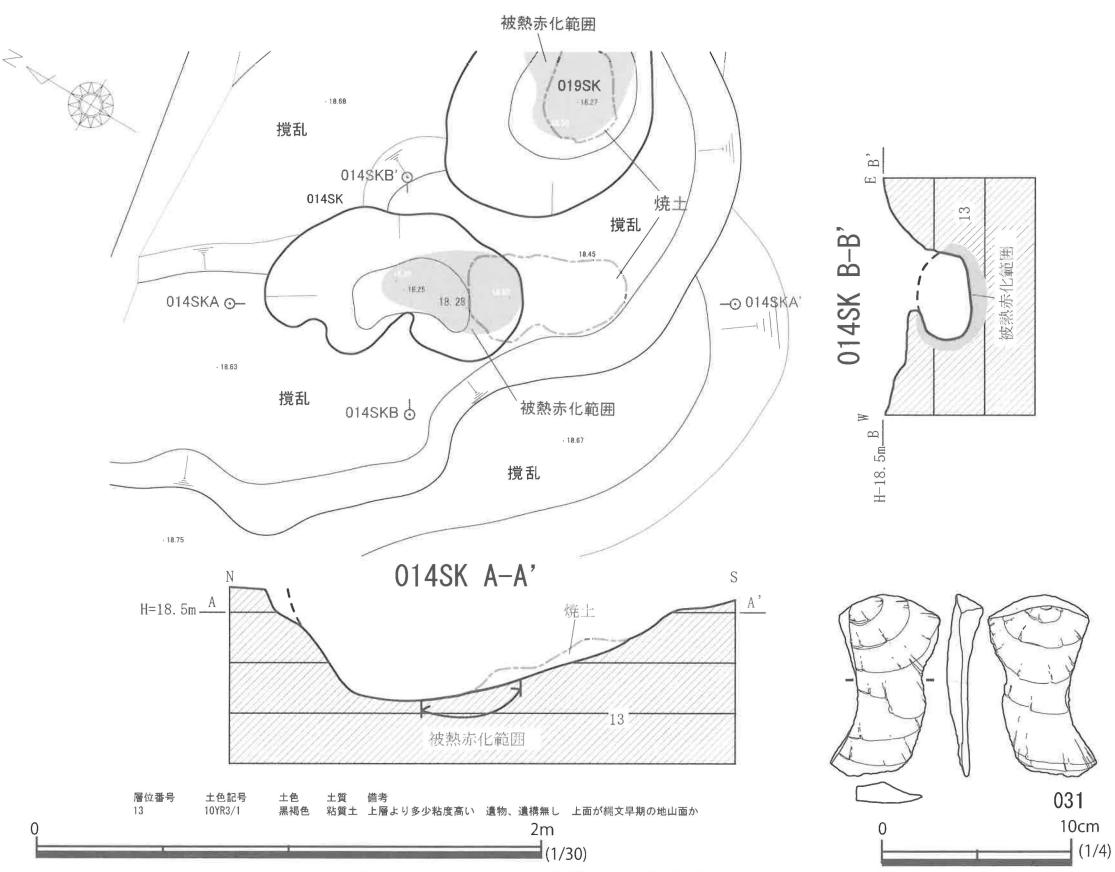
014SK (第3-7図 014SK 遺構図・遺物実測図)

続いて記述する019SKと焚き口部分を切り合う炉穴である。平面プランは変形した橢円形と考えることも出来るので、3類ということになるが、瓢箪形として抽出すべきかもしれない。全長1mほどで完結する比較的小型の炉穴であるが、焚き口から奥に向かって下り傾斜を見る。更に、床面が一番下がった部分が即ち奥壁であり、そのまま急角度で上昇し、煙道部を形成している。残存した深さは0.4m以上あり、炉穴本体は拳大以下のチャート礫を含む地山を掘り抜いて作られている。天井部分は崩落していたが、一部にオーバーハングした残存部分があり(B-B')、押しつぶされたような橢円形の断面形状の横幅は0.3m程度である。床面には被熱して赤化した部分と、天井や側壁部分が崩落して堆積した焼土塊がみられた。

埋土中から、安山岩製の縦長剥片031が出土している。

019SK (第3-8図 019SK 遺構図)

前記014SKと焚き口を切り合う炉穴である。切り合いの新旧は、014SKの焚き口部分を一部削平するように掘削された019SKの様相が確認できたため、014SKが古く、019SKが新しいといふことが言え



第3-7図 014SK 遺構図・遺物実測図

る。地山礫層を掘り抜いて構築されている。

平面プランは基本的に橢円形と考えられるが、煙道部寄りで多少括れるので、やはり瓢箪形と呼ぶべきかもしれない。全長は 1.33 m、最大幅は 0.64 m で、焚き口から煙道部奥壁に向かってかなりの角度で下り傾斜を見る。検出面より 0.5 m 以上の深さを測る奥壁部分は煙道部の立ち上がり部分となつておらず、急角度で上昇する。

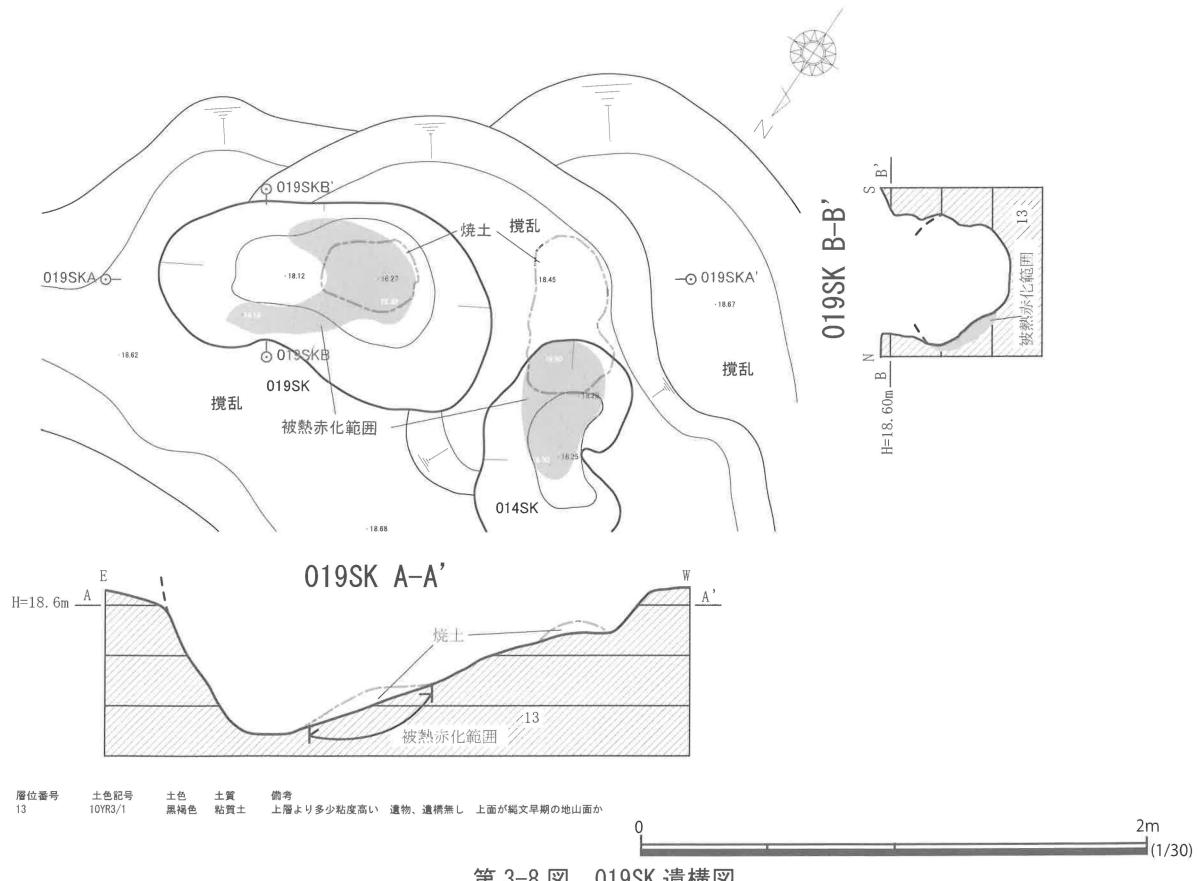
床面の焼土に混ざって検出された炭化物の年代測定結果は、9530 ± 35BP という数値を得ており、先述の 002SK 同様、早期前葉の範疇である。

022SK (第3-9 図 022SK 遺構図・遺物実測図)

調査終盤、炉穴 003SK を精査中に発見した炉穴である。平面形は大きく開く二等辺三角形で、1 類に分類される。

一部を調査区南限のセクショントレンチで切られており、また焚き口末端は調査区外のため正確な全長は不明であるが、検出された部分の長さは 1.72 m で、最大幅 0.88 m である。

この炉穴の右袖を切るように作られていた 003SK は、床面だけが残存していたが、赤色硬化が著しく検出が容易であった。しかし、この 022SK は殆ど被熱の痕跡がみられず、特に焚き口部分はごくわずかな炭化物と焼土ブロック細片を含んだ埋土の詳細な観察からプランを確定することが出来たものである。焚き口部分から掘削を開始し、北側に行くにつれて徐々に側壁状に狭まって行き、僅かに天井部分が残ったあたりの床面に至りようやく、弱々しい被熱の痕跡を確認することが出来た。床面は焚き口周辺から奥に向かって下り傾斜を見せるが、天井の残った部分とそのすぐ奥あたりで被熱部分



第3-8 図 019SK 遺構図

がわずかに盛り上がっていた。奥壁はかなりの角度で立ち上がっているようであるが、当時の地上面からは0.3m以上の深さがあったものと推定される。天井の残った部分の床面から土器023を1片検出することができたが、撫糸文土器の口縁部と思われる。

全体の観察から、この炉穴は掘削されて一度または多くとも数度以下の使用後に、放棄されたものと推定される。

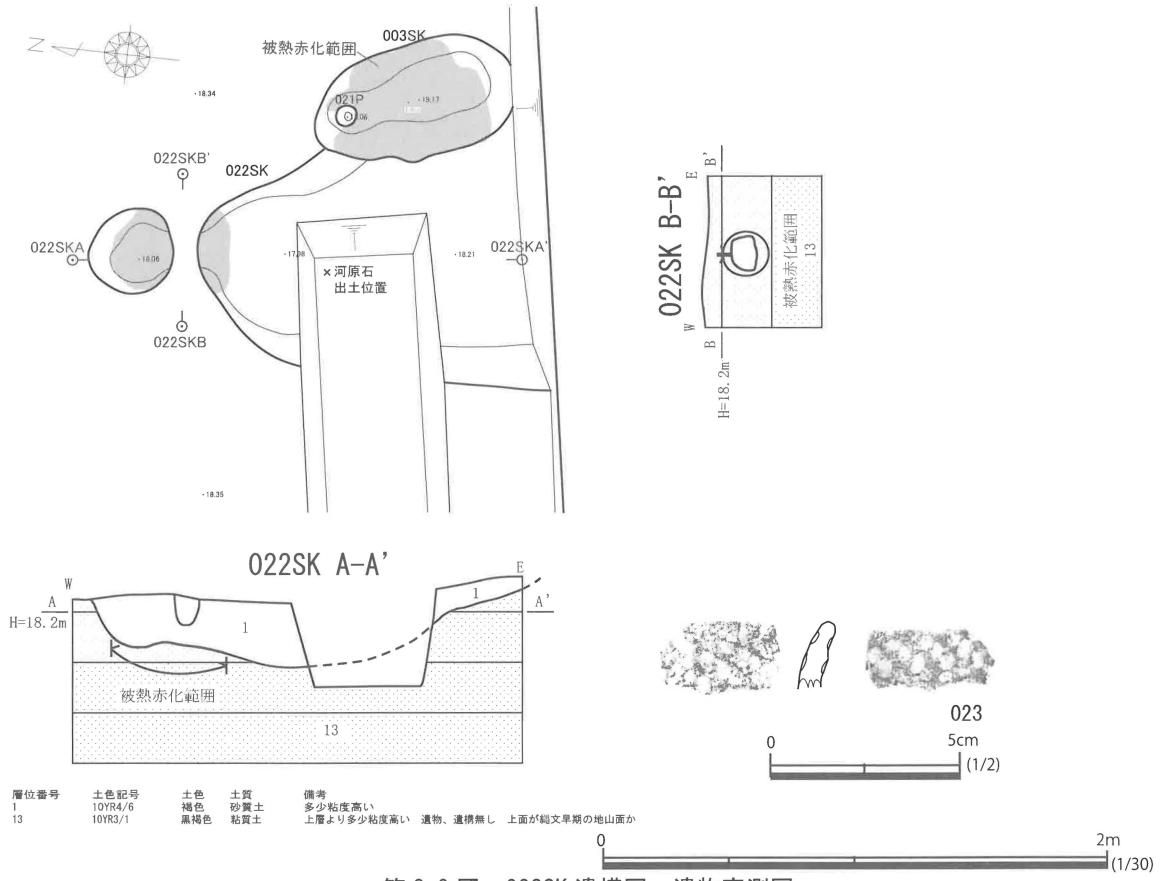
なお、焚き口と推定される部分より、河原石(11.6kg)が1個出土した。トレーナー掘削によって本体検出以前に取り上げられてしまったため、出土状況の詳細を観察することはできなかったが、その様子はあたかも炉穴の焚き口を閉塞するように置かれていたとも推測できる。河原石に被熱の痕跡はみられなかった。

被熱した床面から採取した炭化物の年代測定結果は、9595±30BPであり、数値的には前二者よりも若干古い測定結果が出ているものの、早期前葉の範疇である。

今回の調査範囲で集石炉として認識された遺構は、2基であった。

001SK

001SKはA地区の第2面で検出された遺構で、西側が道路工事によって消失していたが、直径約0.5m、断面形状が掘り鉢状の土坑の中に、被熱礫が詰め込まれていた。採集された被熱礫の重量は11.6kgで、出土状況から集石炉であると推定される。検出面も工事によって削平されていたため、用いられた礫の総重量はこの2倍以上は存在したことであろう。残存部分は地山層に掘り込まれてい



第3-9図 022SK遺構図・遺物実測図

たが、炉穴との重複は確認できなかった。

052SX

052SXは002SKの集石部分で、炉穴廃棄後の凹みを利用して営まれている。詳細は002SKの記述を参照されたい。

その他の炉穴（第3-10図 003SK・020SK 遺構図・遺物実測図）

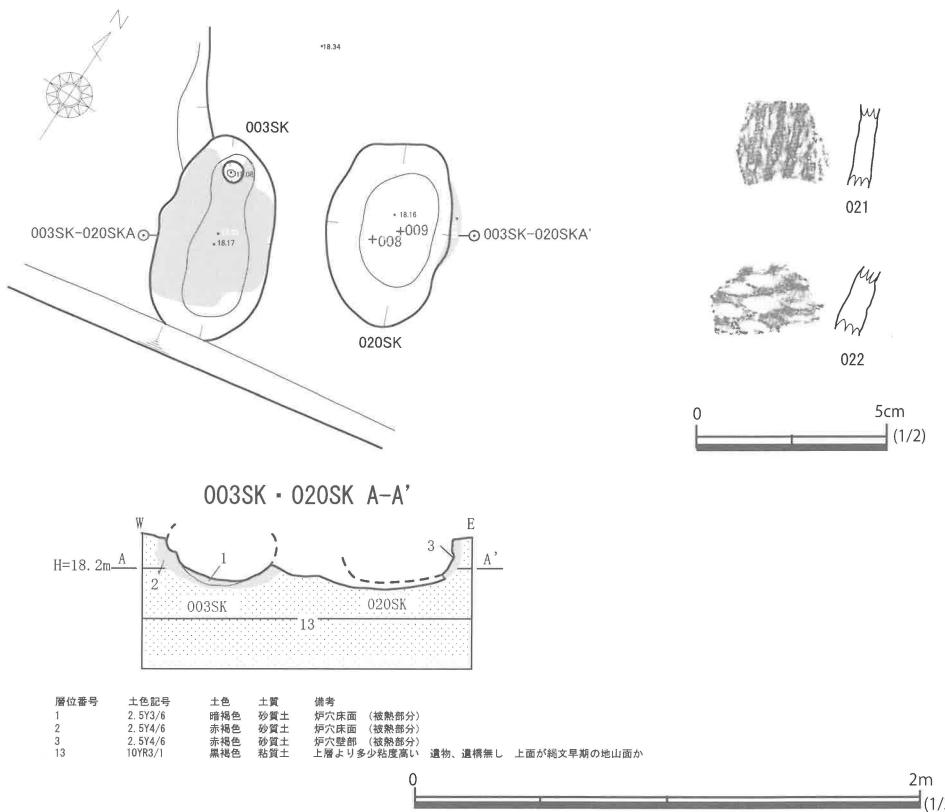
上記の炉穴の他に、003SK、008SK、018SK、020SK等がある。

003SKは東海型炉穴床面の残欠で、やや細長い楕円形形状を呈する。煙道部に相当する床面に小さなピットを伴う。床面はわずかに湾曲し左右が立ち上がるが、残存部の長さは0.82m、最大幅は0.45mである。

008SKは炉穴床面の残欠で、平面楕円プランで皿状に浅く窪む。被熱部分は最大6cmもの厚さが赤化している様子が観察された。

018SKは搅乱によって大半が削平され消失していたが、舌状の床面（傾斜）が被熱していた。残存した長さ0.45m、最大幅0.57mであった。

020SKは被熱して赤化した炉穴側壁のみが残ったものだが、地山から剥離した床面部分の痕跡が不整形な楕円形に残っていた。プラン内から撚糸文土器021と押型文土器022の破片を発見している。003SKと至近距離に、主軸を同方向に向け存在する。構築レベルもほぼ同じであり、ほぼ同時に存在していた可能性もある。



第3-10図 003SK・020SK 遺構図・遺物実測図

これらの他にも、焼土塊の広がりとして検出したものが5箇所ほどあるが、いずれも炉穴の痕跡である可能性が高い。

B. その他の遺構

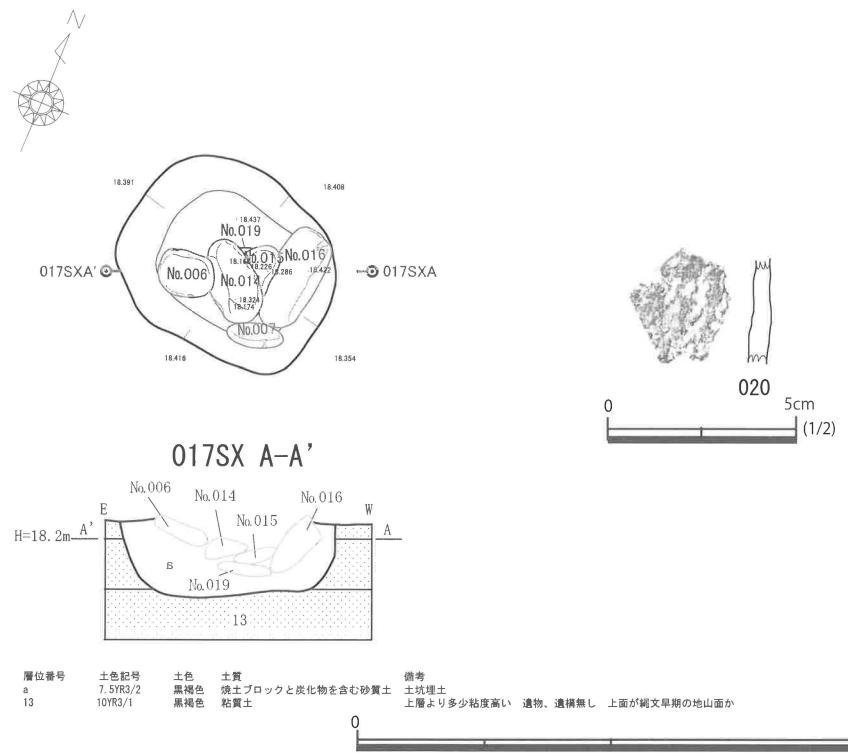
これら、早期前葉の炉穴や集石炉とそれに関連した遺構の他、特殊な遺構も発見されている。

017SX（第3-11図 017SX 遺構図・遺物実測図、第3-12・13図 017SX 遺物実測図1・2）

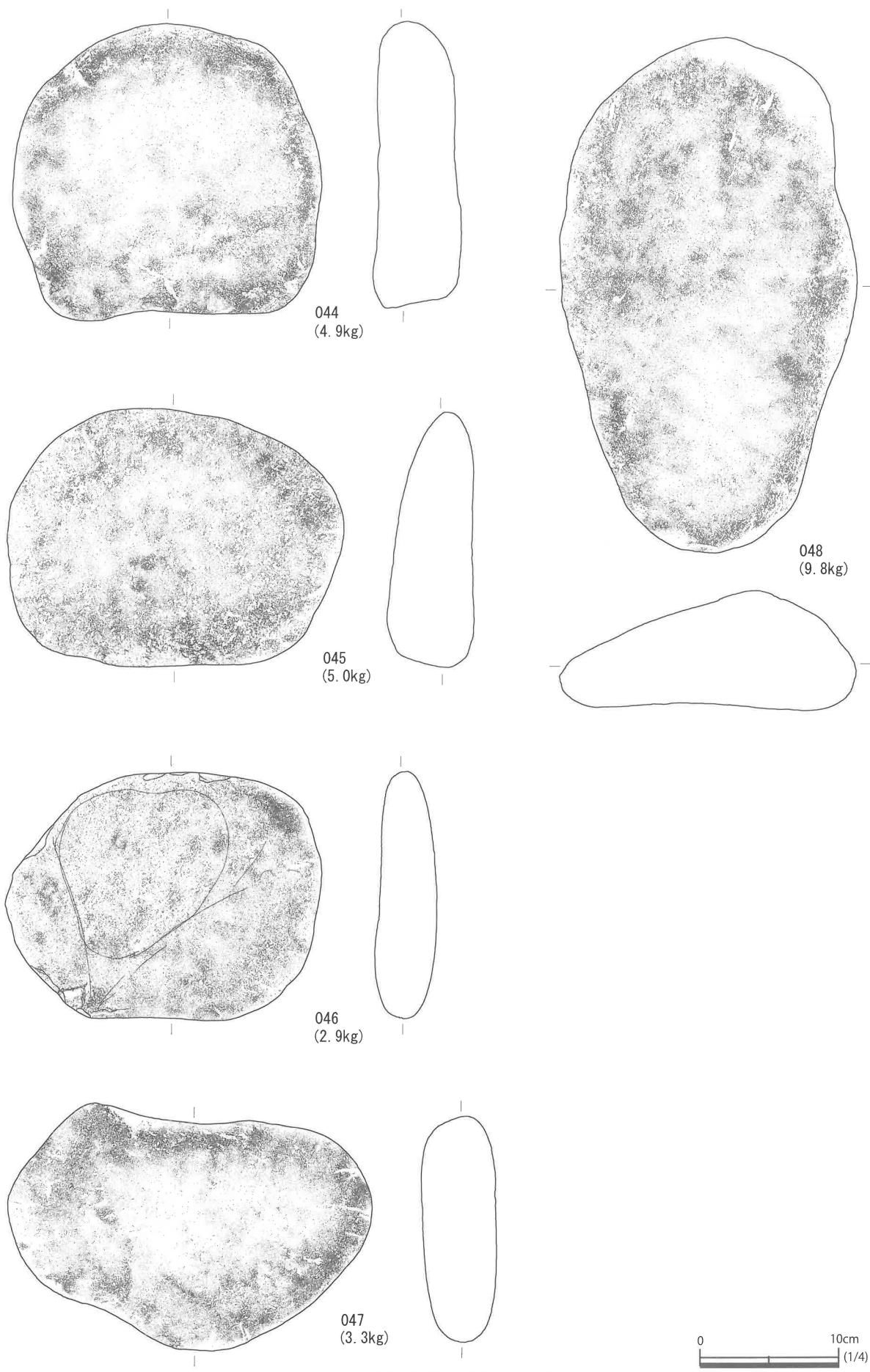
017SXは平面プランが隅丸長方形を呈する土坑で、長径0.86m、短径0.71m、深さ0.35m前後。内部には大小6個の扁平な河原石が組み合わされ、組み置かれたように埋納されており、それらを取り除いた底部付近からは剥片石器が2点出土した。これらの石材自体は、豊川の河原に普通にみられるものであるが、いずれの形状も扁平で、何点かの表面には使用による擦痕や加工の痕跡もみられた。

6個それぞれの重量は、046が2.9kg、047が3.3kg、044が4.9kg、045が5.0kg、048が9.8kg、041が20.3kgであり、総重量は46.2kgに達する。最大の041は表面が人の手によって滑らかに磨かれたようになっており、その細長い特殊な形状と共に極めて特異な存在である。また、これらの河原石と共に出土した剥片040は安山岩であり、それ自体は石器として使われた可能性は低いが、扁平石046の直下に意図的に埋納されたような状況で出土した。また、もう1片の剥片039も安山岩で、土坑の底近くの埋土からの出土である。

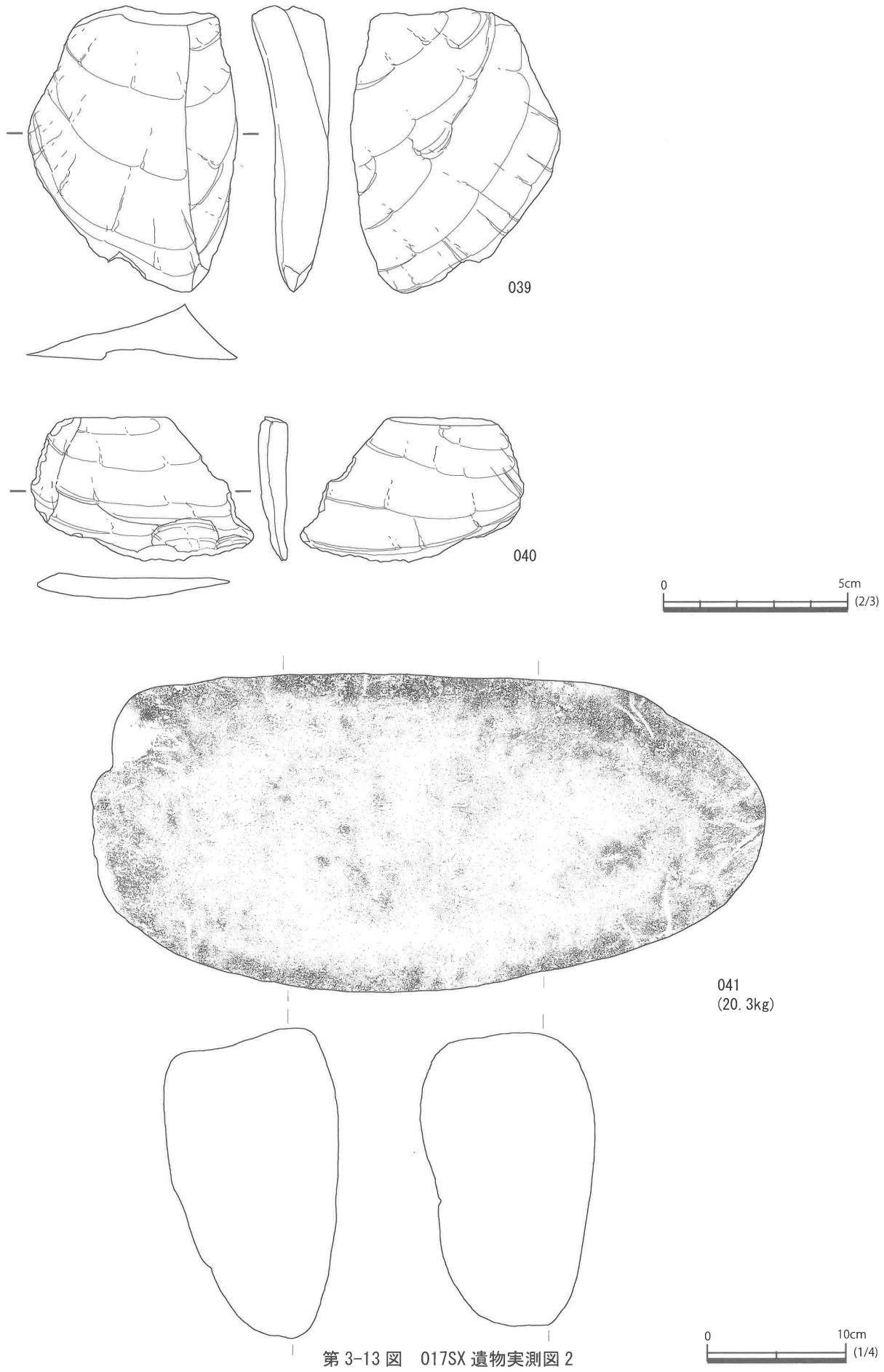
また、土坑埋土下半からは6点ほどの土器片を検出したが、いずれも極めて保存状態が悪く、表面の文様も判然としない。唯一、拓影で示した020は薄手の撚糸文土器で、早期前葉の遺構であること傍証するものである。



第3-11図 017SX 遺構図・遺物実測図



第3-12図 017SX 遺物実測図 1



この017SXは、その形状や規模から墓壙である可能性も考慮して検出を進めたが、土坑内部の容量に比して大石の占める容量が大半であることや、例えばこれらの大石が墓標として土坑の上部に置かれたという可能性も想定してみたが、出土状況を見る限り、その後陥没して土坑内に入り込んだという可能性は低いようである。これらの大石は全て、石皿として直ちに使用することが可能な形状であることから、石皿用石材の埋納遺構であるとも考えられるが、同様の遺構は類例に乏しい。^{*}これらの河原石に被熱の痕跡は見られなかったが、土坑の埋土には細かな木炭片や焼土ブロックが混ざっていた。

なお、土坑底部から採取した炭化物の年代測定結果は、9440 ± 25BP という数値が出ており、炉穴から採取した資料同様、早期前葉に属する遺構であることが判明した。

046SK

2.5 m × 1.7 m ほどの不整形な土坑で、第1面で検出されたものである。

埋土の上半は搅乱層が混入しており、近世の遺物も含まれていたので、全体が搅乱である可能性もあるが、検出面より 0.4 m ほど掘り込まれた土坑下半部は地山まで達しており、その地山面で剥片や珪化木などとともに、縄文土器片を 5 点 (024 ~ 028) 採集した。押型文土器と撫糸文土器である。

2) 遺 物

A. 炉穴と集石炉

縄文時代に属する遺物としては、土器と石器がある。

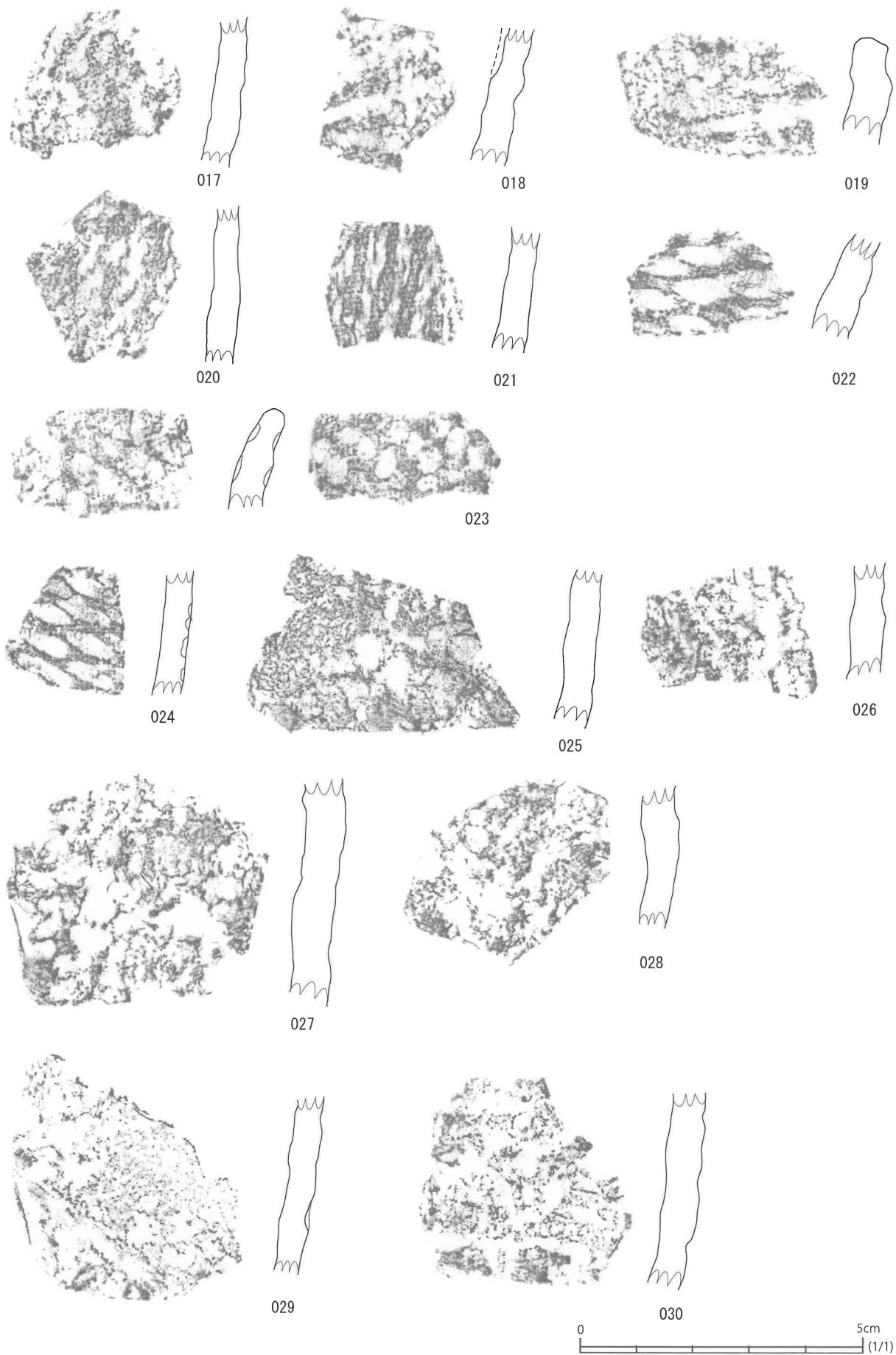
炉穴などの遺構から出土した主要な遺物は、各遺構のなかで言及しているが、今回拓影を示すことの出来た縄文土器は 14 片であり、巻頭写真 4 と第3-14 図土器拓影図に上げる実物大の拓影図を集め提示しておく。

内容としては撫り目の粗い撫糸文土器が大半であるが、押型文も 3 点みられる。押型文土器の胎土は撫糸文土器に比して緻密なものが多く、文様の特徴からいざれも、早期前葉の大川式萩平型範疊の資料であると思われる。

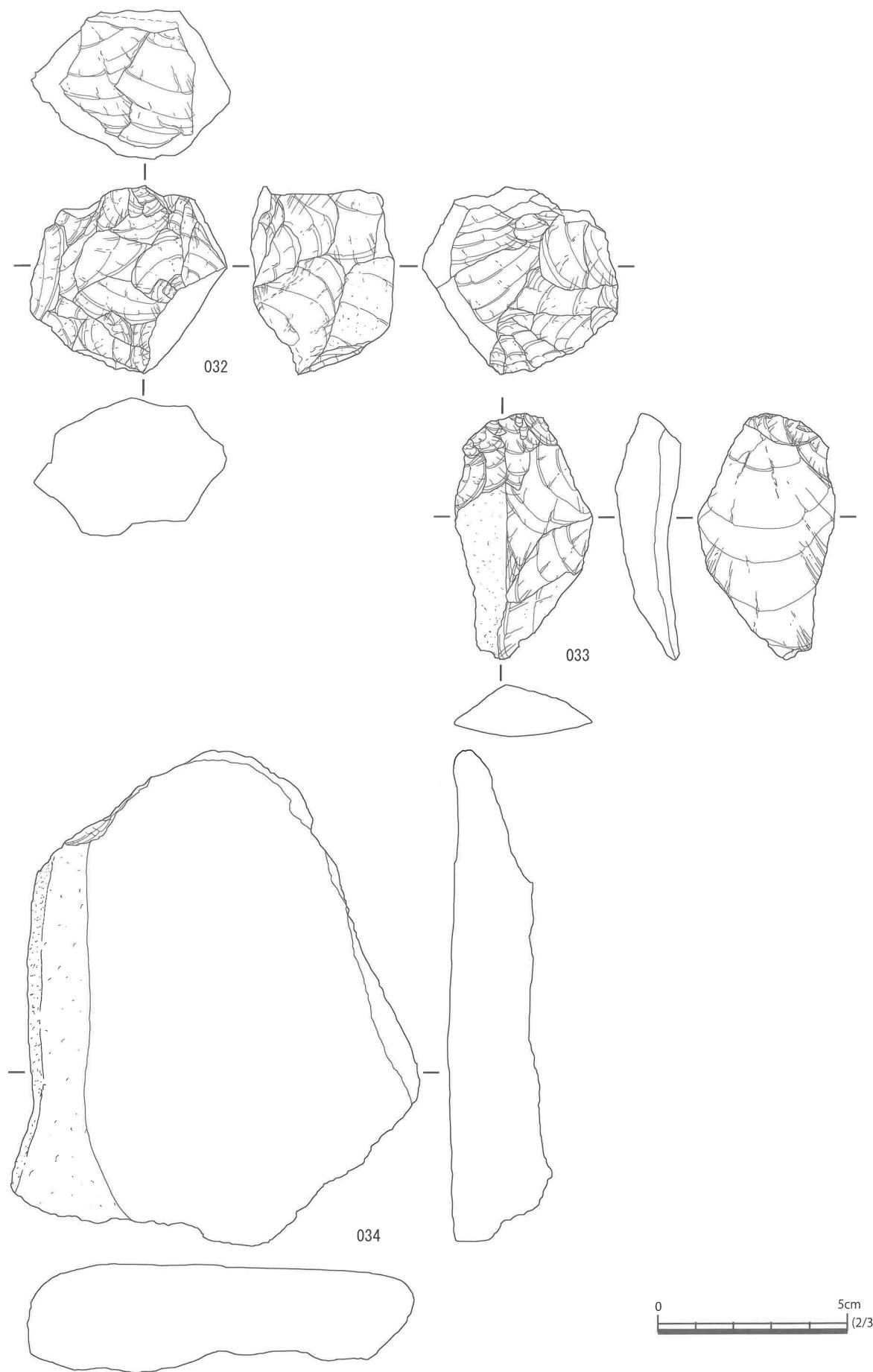
石器は定形のものが見られず、第3-15・16 図石器実測図 1・2 の石核や剥片のほか、石皿や磨石、そして 017SX の項目で言及した大きな河原石群などがみられる。

032 はいわゆる白色風化石材（熔結凝灰岩）で、打面転移を繰り返しながら剥片を剥ぎ取った様子が観察される。大きさからみて、石鏃用の石核であろう。033 は白色風化石材製の縦長の剥片である。034 は安山岩製の石皿と考えられるが、磨面の摩耗はあまり進んでいない。036 は 009SK に埋納されていた石皿で、片麻岩製。磨面は断面図にみられるように僅かに窪む程度であり、余り激しく使用された痕跡は見られない。左上にみられる剥離痕は、平面を作り出す際の加工の痕跡であろう。037 と 038 は、いざれも磨石で、花崗岩製。037 は使用後または廃棄時に半割されたようである。

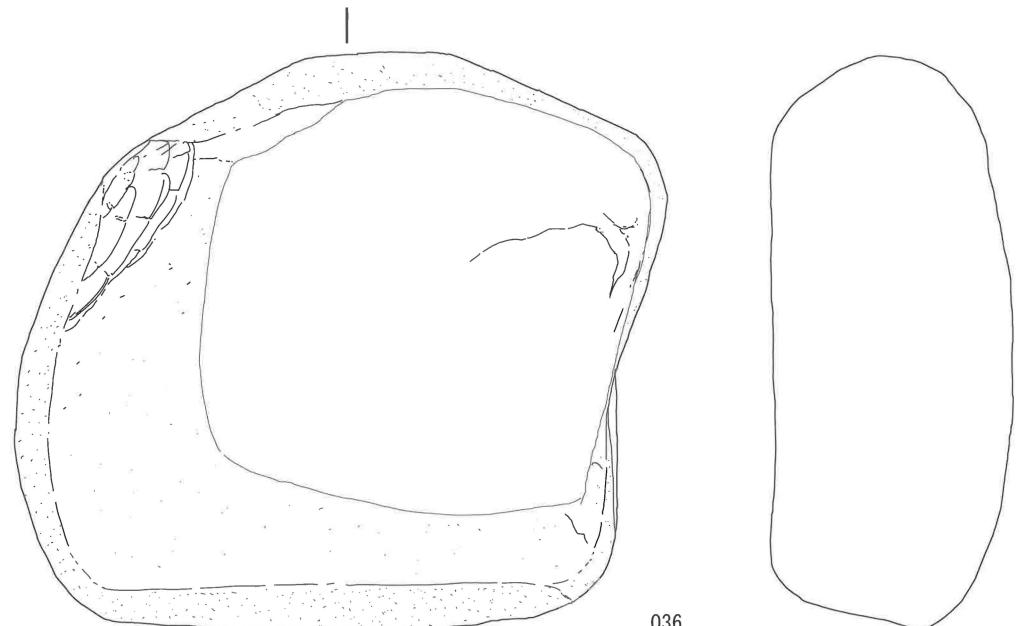
* 土坑底部に石皿様の扁平な石を敷き詰めた遺構が、田原市の雁合遺跡で発見されている。所属時期は早期の押型文土器期であり、当遺跡との関連が注目される。（未報告）



第3-14図 土器拓影図

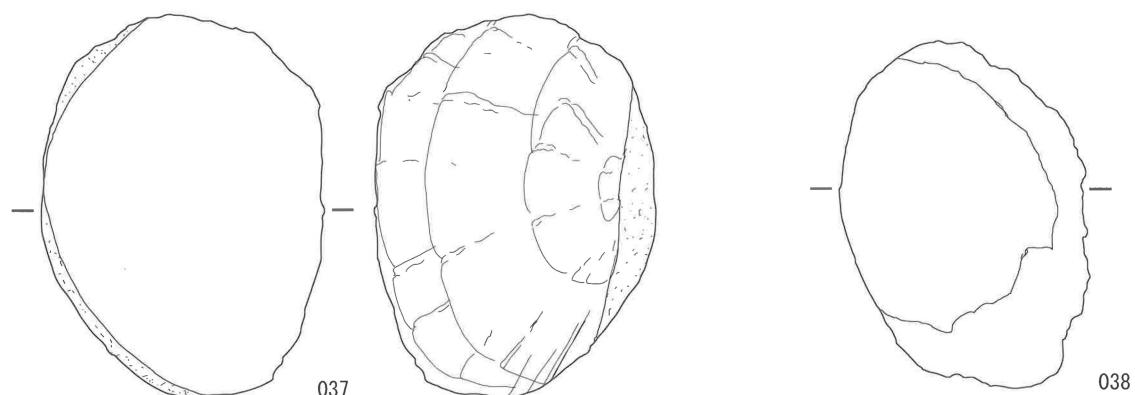


第3-15図 石器実測図1



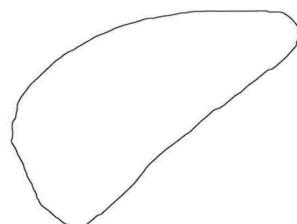
036

0 10cm
(2/5)



037

038



0 5cm
(2/3)

第3-16図 石器実測図2

4. 縄文時代以外の遺構と遺物

縄文時代以外の遺構としては、第3-17図第1面平面図に示す遺構で、A地区の道路敷き部分幅1.5m×長さ14mで密集する傾向がみられるが、B地区でも近世の柱穴や溝と推定されるものがある。

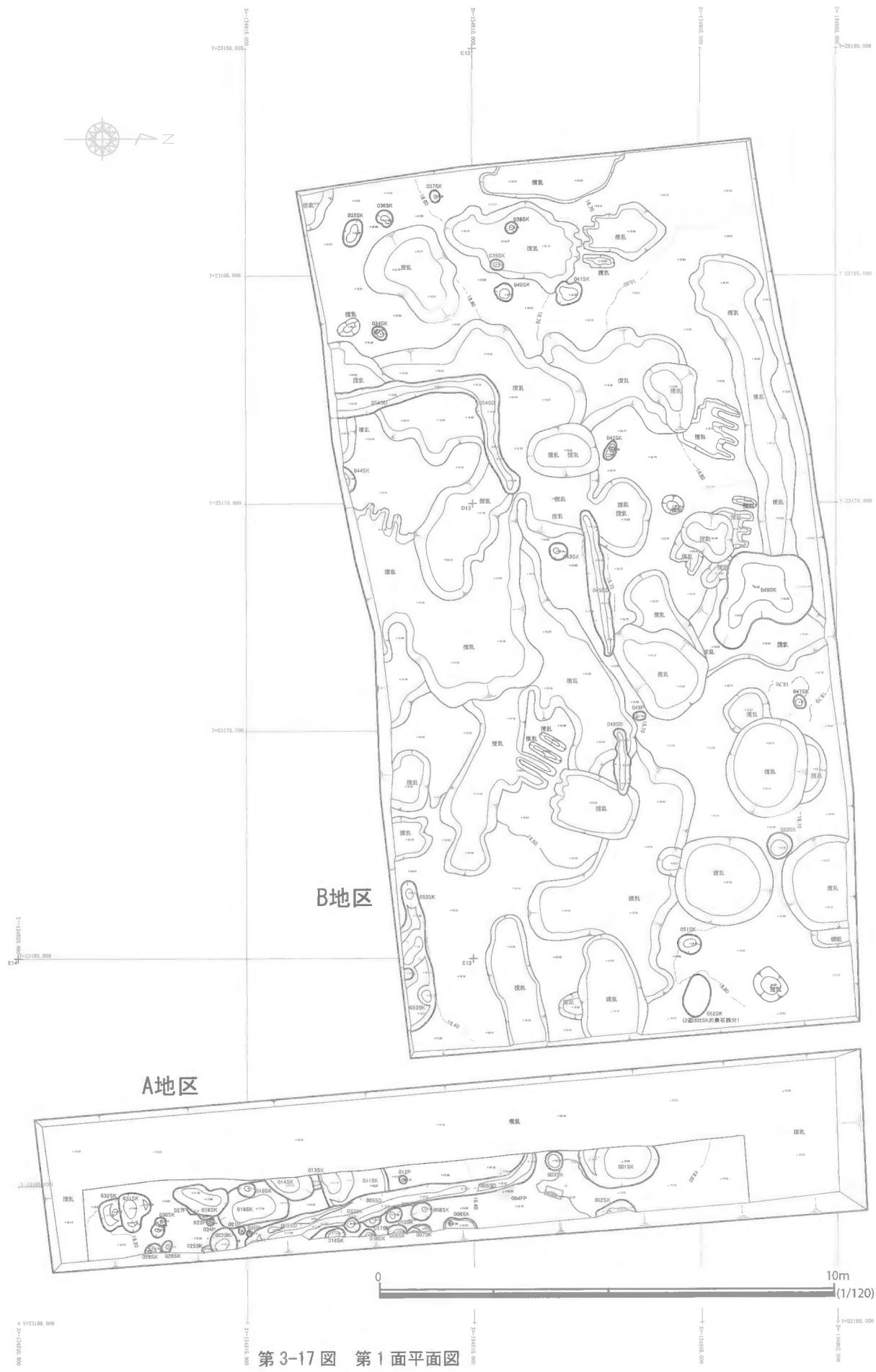
大きな水甕などを埋設した痕跡であると思われる001SKの他、南に向かって徐々に深くなり排水溝と推定される005SD。並びとお互いの関係は不明だが、柱穴と考えられる008P、010P、011P、015P、018P、022SK、031SK等があるが、第3-18図第1面022SK遺構図のように根固め用の石が検出されたものがいくつかある。

B地区にも、何本かの溝の痕跡とピットなどが見られるも、激しい搅乱による残欠的なものがほとんどであり、個々の性格を断定するに至っていない。

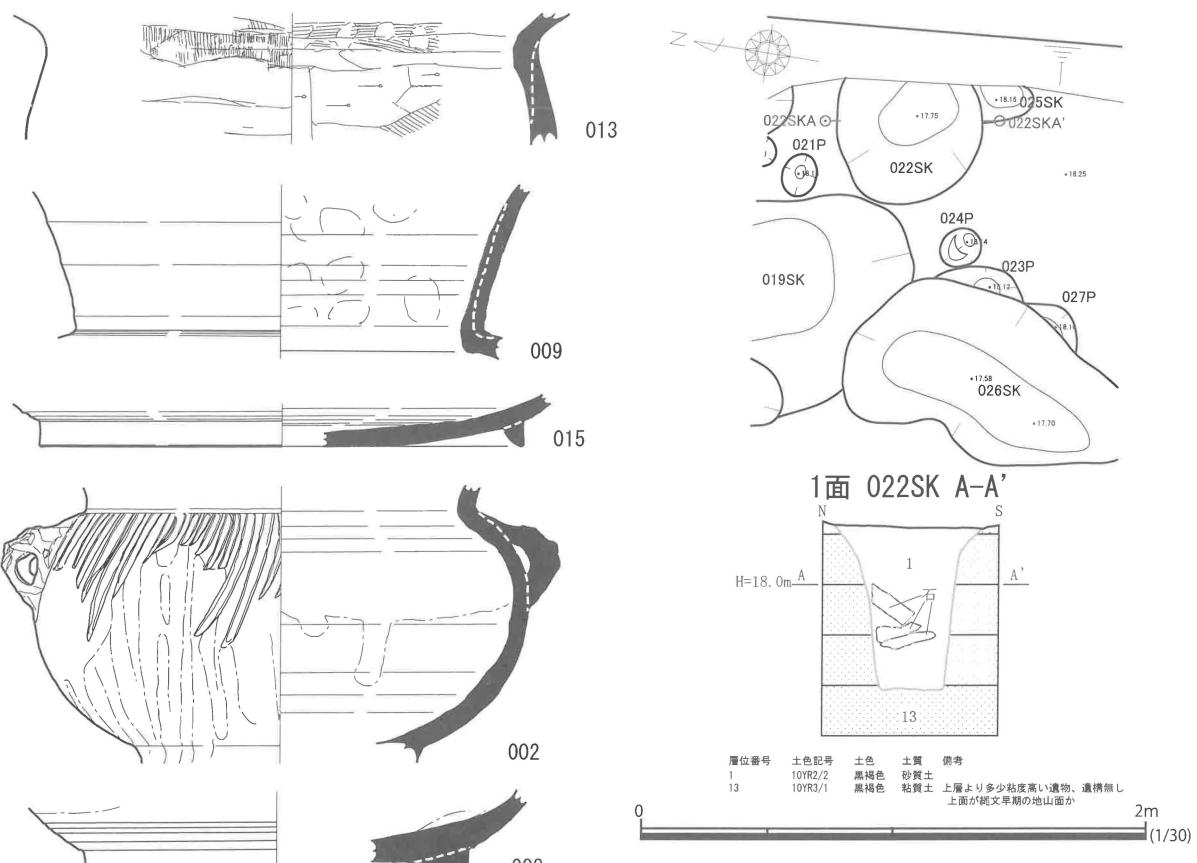
これらの遺構や上層の遺物包含層からは、第3-19図縄文時代以外の遺物実測図に掲げる多くの近世陶磁器が発見されたが、ごく少量の古代の遺物も含まれていた。

009・013・015・016は古代後半に属する遺物で、009は灰釉陶器の広口壺、013は土師質の甕、015は灰釉陶器の盤と思われる。016は渥美窯の大甕破片である。

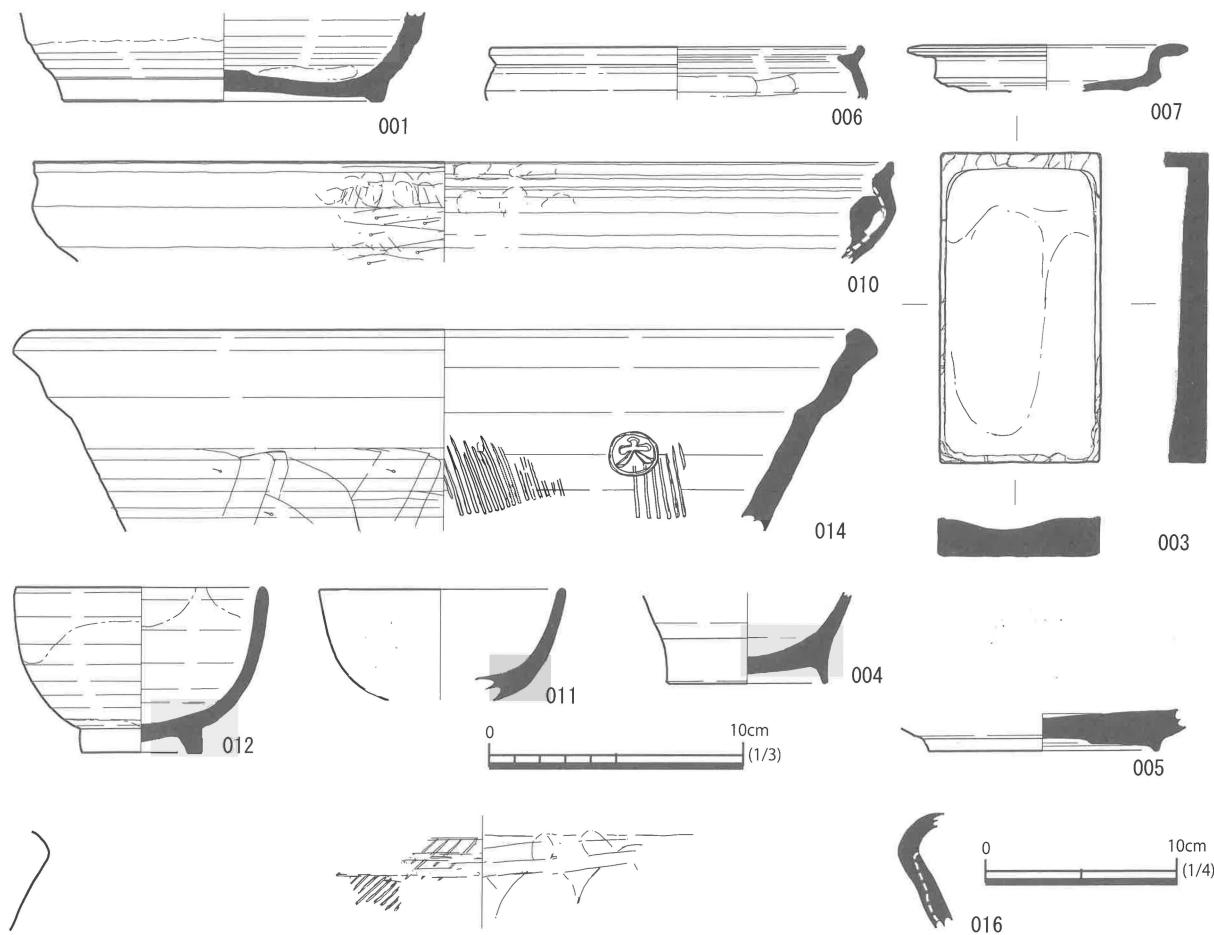
他は全て近世の遺物で、002は球形の胴部に豪快に線彫りで文様を描いた瓶掛で、全面に灰釉がかけられている。001は鉄釉の施された鉢または火入れで、削り出し高台の底面仕上げが為されている。008は内外に灰釉の施された捏鉢で、底部に煤が付着している。006は小型の行平鍋で、外面には呉須で唐草文が描かれている。003は黒色の粘板岩製の硯で、激しく使用されたせいか表面縁辺部が破損し、摩耗痕が残る。底面には無数の搔き傷が付いている。010は直径33cmほどの内耳焙烙で、外面には煤が付着している。014は擂鉢で、内面に○に大の窯印が押捺されている。011・012は丸碗で012は鉄釉と灰釉の二重がけで、011は呉須で梅花文を描いた上に透明釉がかけられている。004は独特の立ち上がりを見せる器形の碗で、廣東碗と呼ばれるもの。鋭く削り出された高台が特徴である。005は見込みに透明釉施釉後に呉須で花文を描いた磁器の皿で、底面は蛇の目高台仕上げとする。007は見込みに灰釉のかけられた土瓶の蓋である。これらの陶磁器類はいずれも江戸時代後期19世紀代の製品であり、日常的な生活雑器である。



第3-17図 第1面平面図



第3-18図 第1面 022SK 遺構図



第3-19図 繩文時代以外の遺物実測図

5. 科学分析

1) 放射性炭素年代測定

1. はじめに

眼鏡下池北遺跡は愛知県豊橋市牛川町東側地内、西側遺跡は同西側地内に所在する。発掘調査により、眼鏡下池北遺跡からは縄文時代早期、西側遺跡からは弥生時代の遺構・遺物が検出された。眼鏡下池北遺跡で検出された遺構の年代および西側遺跡で検出された条痕文系土器片の年代を検討するために、両遺跡より検出された試料について、加速器質量分析法（AMS法）による放射性炭素年代測定を行った。

2. 試料と方法

測定試料の情報、調製データは第3-1表測定試料および処理のとおりである。

眼鏡下池北遺跡の試料は、4遺構から検出された炭化物である。試料No.MNG-1(PLD-14304)は002SKから採取された炭化材、MGN-2(PLD-14305)は019SKから採取された炭化植物遺体、MGN-3(PLD-14306)は022SKから採取された炭化材、MGN-4(PLD-14307)は017SXから採取された炭化材である。西側遺跡の試料No.NSG-2(PLD-14308)は、958SKから出土した弥生時代の条痕文系土器片（甕）に付着した炭化物である。土器片の部位は胴部で、炭化物は外面に付着していた。

第3-1表 測定試料および処理

測定番号	遺跡データ	試料データ	前処理
PLD-14304	遺跡名：眼鏡下池北遺跡 遺構：002SK 試料No.MGN-1 カード記載：MGN-K B E12 2面 002SK 2層 081027 焼き口下半 3-12 備考：牛川②	試料の種類：炭化材（破片複数） 試料の性状：部位不明 状態：dry	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸：1.2N, 水酸化ナトリウム：1N, 塩酸：1.2N）
PLD-14305	遺跡名：眼鏡下池北遺跡 遺構：019SK 試料No.MGN-2 カード記載：MGN-K B C12 2面 019SK 2層 081029 3-39 備考：牛川③	試料の種類：炭化植物遺体 試料の性状：部位不明 状態：dry	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸：1.2N, 水酸化ナトリウム：1N, 塩酸：1.2N）
PLD-14306	遺跡名：眼鏡下池北遺跡 遺構：022SK 試料No.MGN-3 カード記載：MGN-K B D13 2面 022SK 2層 081031 3-41 備考：牛川④	試料の種類：炭化材（破片複数） 試料の性状：部位不明 状態：dry	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸：1.2N, 水酸化ナトリウム：1N, 塩酸：1.2N）
PLD-14307	遺跡名：眼鏡下池北遺跡 遺構：017SX 試料No.MGN-4 カード記載：MGN-K B D13 2面 017SX 2層 081029 埋土下底 3-41	試料の種類：炭化材（破片複数） 試料の性状：部位不明 状態：dry	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸：1.2N, 水酸化ナトリウム：1N, 塩酸：1.2N）
PLD-14308	遺跡名：西側遺跡 遺構：958SK 試料No.NSG-2 カード記載：NSG A4 Q7 958SK Asec 2層 090206	試料の種類：土器付着炭化物 試料の性状：胴部外面 その他：条痕文 状態：dry	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸：1.2N, 水酸化ナトリウム：1N, 塩酸：1.2N）

試料は調製後、加速器質量分析計（パレオ・ラボ、コンパクトAMS:NEC製 1.5SDH）を用いて測定した。得られた¹⁴C濃度について同位体分別効果の補正を行った後、¹⁴C年代、暦年代を算出した。

3. 結 果

第3-2表放射性炭素年代測定及び暦年較正の結果に、同位体分別効果の補正に用いる炭素同位体比（ $\delta^{13}\text{C}$ ）、同位体分別効果の補正を行って暦年較正に用いた年代値、慣用に従って年代値、誤差を丸めて表示した¹⁴C年代、¹⁴C年代を暦年代に較正した年代範囲を、第3-20図暦年較正結果にそれぞれ示す。暦年較正に用いた年代値は下1桁を丸めていない値であり、今後暦年較正曲線が更新された際にこの年代値を用いて暦年較正を行うために記載した。

¹⁴C年代はAD1950年を基点にして何年前かを示した年代である。¹⁴C年代(yrBP)の算出には、¹⁴Cの半減期としてLibbyの半減期5568年を使用した。また、付記した¹⁴C年代誤差($\pm 1\sigma$)は、測定の統計誤差、標準偏差等に基づいて算出され、試料の¹⁴C年代がその¹⁴C年代誤差内に入る確率が68.2%であることを示す。

第3-2表 放射性炭素年代測定及び暦年較正の結果

測定番号	$\delta^{13}\text{C}$ (‰)	暦年較正用年代 (yrBP $\pm 1\sigma$)	¹⁴ C年代 (yrBP $\pm 1\sigma$)	¹⁴ C年代を暦年代に較正した年代範囲	
				1 σ 暦年代範囲	2 σ 暦年代範囲
PLD-14304 試料No. MGN-1	-26.36 \pm 0.25	9490 \pm 29	9490 \pm 30	8833BC(68.2%) 8735BC	9117BC(9.1%) 9070BC 9060BC(8.5%) 9011BC 8913BC(0.7%) 8904BC 8846BC(75.8%) 8706BC 8670BC(1.3%) 8657BC
PLD-14305 試料No. MGN-2	-28.35 \pm 0.14	9530 \pm 33	9530 \pm 35	9117BC(19.2%) 9074BC 9057BC(18.2%) 9012BC 8913BC(2.8%) 8904BC 8845BC(28.1%) 8779BC	9126BC(45.6%) 8996BC 8926BC(49.8%) 8752BC
PLD-14306 試料No. MGN-3	-25.94 \pm 0.19	9595 \pm 28	9595 \pm 30	9141BC(8.7%) 9116BC 9077BC(6.8%) 9055BC 9016BC(16.4%) 8969BC 8951BC(36.4%) 8843BC	9173BC(0.3%) 9170BC 9158BC(95.1%) 8820BC
PLD-14307 試料No. MGN-4	-24.89 \pm 0.14	9442 \pm 27	9440 \pm 25	8767BC(56.0%) 8704BC 8671BC(12.2%) 8654BC	8796BC(95.4%) 8637BC
PLD-14308 試料No. NSG-2	-24.81 \pm 0.12	2279 \pm 18	2280 \pm 20	394BC(68.2%) 364BC	399BC(75.0%) 357BC 285BC(16.3%) 254BC 248BC(4.1%) 234BC

なお、暦年較正の詳細は以下のとおりである。

暦年較正とは、大気中の¹⁴C濃度が一定で半減期が5568年として算出された¹⁴C年代に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の¹⁴C濃度の変動、及び半減期の違い（¹⁴Cの半減期5730 \pm 40年）を較正して、より実際の年代値に近いものを算出することである。

¹⁴C年代の暦年較正にはOxCal4.1(較正曲線データ:INTCAL04)を使用した。なお、1 σ 暦年代範囲は、OxCalの確率法を使用して算出された¹⁴C年代誤差に相当する68.2%信頼限界の暦年代範囲であり、

同様に 2σ 暗年年代範囲は 95.4% 信頼限界の暗年年代範囲である。カッコ内の百分率の値は、その範囲内に暗年代が入る確率を意味する。グラフ中の縦軸上の曲線は ^{14}C 年代の確率分布を示し、二重曲線は暗年較正曲線を示す。

4. 考 察

眼鏡下池北遺跡の 002SK から採取された MNG-1 (PLD-14304) は、 1σ 暗年年代範囲（確率 68.2%）で 8833–8735calBC(68.2%)、 2σ 暗年年代範囲（確率 95.4%）で 9117–9070calBC(9.1%)、9060–9011calBC(8.5%)、8913–8904calBC(0.7%)、8846–8706calBC(75.8%)、8670–8657calBC(1.3%) の範囲を示した。

019SK から採取された MGN-2 (PLD-14305) は、 1σ 暗年年代範囲で 9117–9074calBC(19.2%)、9057–9012calBC(18.2%)、8913–8904calBC(2.8%)、8845–8779calBC(28.1%)、 2σ 暗年年代 9126–8996calBC(45.6%) および 8926–8752calBC(49.8%) の範囲を示した。

022SK から採取された MGN-3 (PLD-14306) は、 1σ 暗年年代範囲で 9141–9116calBC(8.7%)、9077–9055calBC(6.8%)、9016–8969calBC(16.4%)、8951–8843calBC(36.4%)、 2σ 暗年年代範囲で 9173–9170calBC(0.3%) および 9158–8820calBC(95.1%) の範囲を示した。

017SX から採取された MGN-4 (PLD-14307) は、 1σ 暗年年代範囲で 8767–8704calBC(56.0%) および 8671–8654calBC(12.2%)、 2σ 暗年年代範囲で 8796–8637calBC(95.4%) の範囲を示した。

眼鏡下池北遺跡から採取された 4 試料の暗年較正結果は、小林謙一による暗年較正結果と縄文土器編年との対応関係（小林 2008）を参照すると、いずれも縄文時代早期前葉に相当する。

西側遺跡から出土した弥生時代の条痕文系土器片に付着した炭化物は、 1σ 暗年年代範囲で 394–364calBC (68.2 %)、 2σ 暗年年代範囲で 399–357calBC (75.0 %)、285–254calBC (16.3 %)、248–234calBC (4.1%) の範囲を示した。東海地方では縄文時代晩期から弥生時代前期の年代測定点数が少なく（山本 2007）、西側遺跡の年代測定結果は測定例の蓄積という意味で重要である。

パレオ・ラボ AMS 年代測定グループ（伊藤茂・尾寄大真・丹生越子・廣田正史
・小林紘一・Zaur Lomtadidze・Ineza Jorjoliani・中村賢太郎）

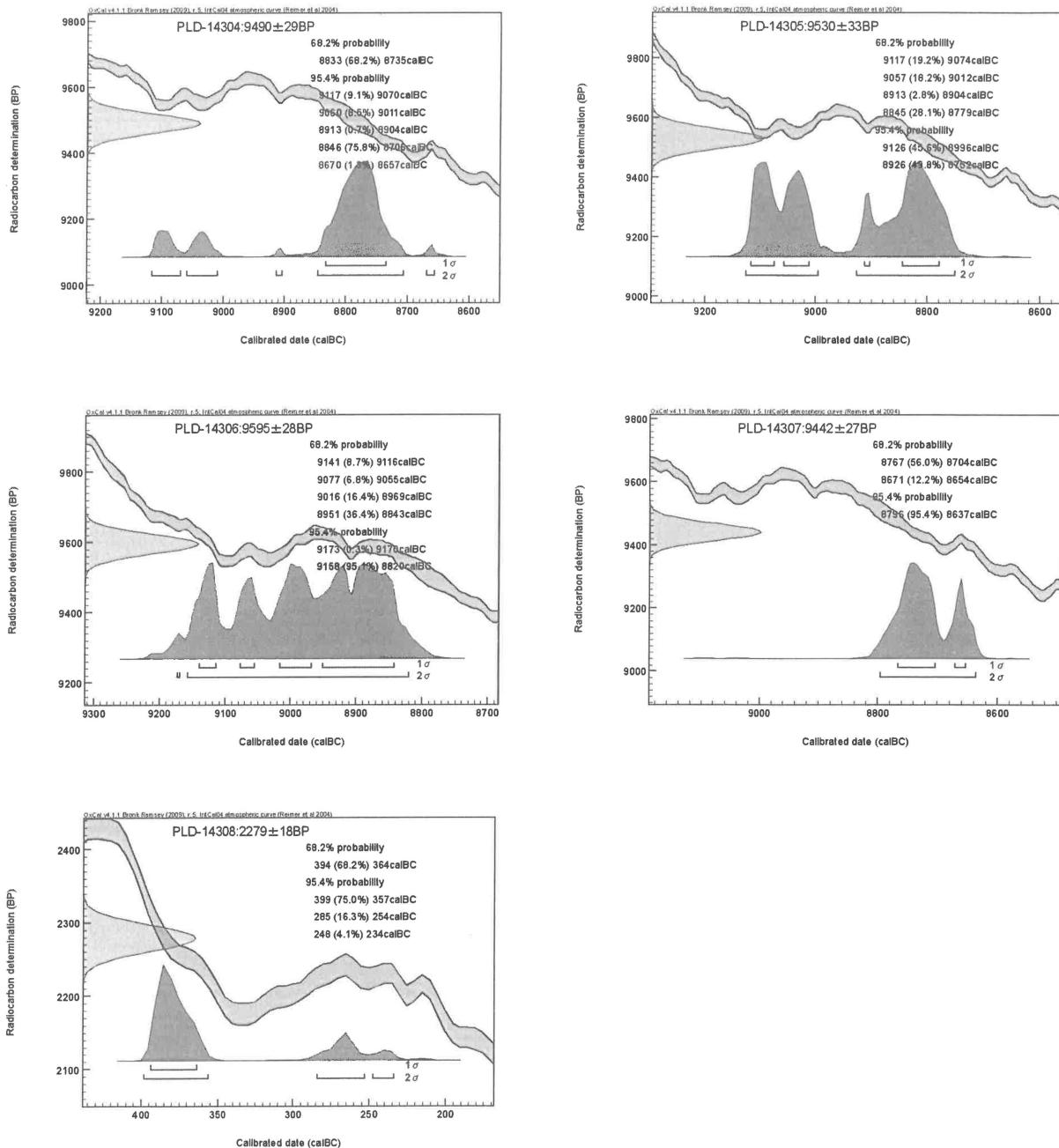
(参考文献)

- Bronk Ramsey, C. (1995) Radiocarbon Calibration and Analysis of Stratigraphy: The OxCal Program. Radiocarbon, 37, 425–430.
- Bronk Ramsey, C. (2001) Development of the Radiocarbon Program OxCal. Radiocarbon, 43, 355–363.
- 小林謙一 (2008) 縄文時代の暗年代. 縄文時代の考古学 2-歴史のものさし, 257–269, 同成社.
- 中村俊夫 (2000) 放射性炭素年代測定法の基礎. 日本先史時代の ^{14}C 年代, 3–20.
- Reimer, P.J., Baillie, M.G.L., Bard, E., Bayliss, A., Beck, J.W., Bertrand, C.J.H., Blackwell, P.G., Buck, C.E., Burr, G.S., Cutler, K.B., Damon, P.E., Edwards, R.L., Fairbanks, R.G., Friedrich, M., Guilderson, T.P., Hogg, A.G., Hughen, K.A., Kromer, B., McCormac, G., Manning, S., Bronk Ramsey, C., Reimer, R.W., Remmele, S., Southon, J.R., Stuiver, M., Talamo, S., Taylor, F.W., van der Plicht, J., and Weyhenmeyer, C.E. (2004) IntCal04 terrestrial radio

carbon age calibration, 0–26 cal kyr BP. Radiocarbon, 46, 1029–1058.

・山本直人 (2007) 東海・北陸における弥生時代の開始年代. 新弥生時代のはじまり 第2巻 繩文時代から弥生時代へ.

35–44, 雄山閣.



第3-20図 曆年較正結果

2) 炭化材の樹種

1. はじめに

本報告では、縄文時代早期の樹種同定例は少ないため、豊橋市内に所在する縄文時代早期の2遺構から出土した炭化材を対象として、樹種を明らかにするための樹種同定を実施した。

2. 試料

試料は、眼鏡下池北遺跡の第2面の炉穴から検出された炭化材3点(MGN-1～3)と、西側遺跡の堅穴式建物とみられる1005SBから検出された炭化材1点(NSG-1)の合計4点である。

3. 分析方法

試料を自然乾燥させた後、木口(横断面)・柾目(放射断面)・板目(接線断面)の3断面の割断面を作製し、実体顕微鏡および走査型電子顕微鏡を用いて木材組織の種類や配列を観察し、その特徴を現生標本および独立行政法人森林総合研究所の日本産木材識別データベースと比較して種類を同定する。

なお、木材組織の名称や特徴については、島地・伊東(1982)やWheeler他(1998)を参考にする。また、日本産木材の組織配列については、林(1991)や伊東(1995, 1996, 1997, 1998, 1999)を参考にする。

4. 結果

樹種同定結果を第3-3表に示す。MGN-2は、樹皮のみであり、木部細胞が残っていないため樹種は不明である。他の3点は、広葉樹2分類群(コナラ属コナラ亜属コナラ節・クリ)に同定された。各分類群の解剖学的特徴等を記す。

第3-3表 樹種同定結果

試料番号	遺跡名	注記	その他	樹種
MGN-1	眼鏡下池北	MGN-K B E12 2面 002SK 2層 081031焚き口下半3-1	牛川2	クリ
MGN-2	眼鏡下池北	MGN-K B C12 2面 019SK 2層 081029 3-29	牛川3	樹皮
MGN-3	眼鏡下池北	MGN-K B D13 2面 022SX 2層 081031 3-41	牛川4	クリ
NSG-1	西側	NSG A4 N7 1005SB 3層 090218 №.23(炭化物)	牛川5	コナラ属コナラ亜属コナラ節

・コナラ属コナラ亜属コナラ節 (*Quercus* subgen. *Quercus* sect. *Prinus*) ブナ科

環孔材で、孔圈部はほぼ1列、孔圈外で急激に管径を減じたのち、漸減しながら火炎状に配列する。道管は单穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列、1～20細胞高のものと複合放射組織とがある。

・クリ (*Castanea crenata* Sieb. et Zucc.) ブナ科クリ属

試料は、いずれも年輪界で割れているが、年輪界部分に僅かに残る翌年の道管径や、早材部側から晩材部への道管径の変化から環孔材と判断される。道管は、孔圈外でやや急激に管径を減じたのち、漸

減しながら火炎状に配列する。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、單列、1～15細胞高。

5. 考 察

眼鏡下池北遺跡の炉穴から出土した炭化材は、遺構から出土し、炭化していることから、何らかの人間活動により火を受けていることが推定される。002SKの炭化材が焚き口下半から出土していることを考慮すれば、燃料材などの用途が考えられるが、詳細は不明である。これらの炭化材は、019SKが樹皮、他の2点は落葉広葉樹のクリに同定された。クリは、二次林や河畔林等を構成し、木材は重硬で強度・耐朽性が高い材質を有する。また、果実が食用可能であり、オニグルミ等と共に重要な植物食糧の一つとされている。周辺地域では、同時期の木材利用や植物利用に関する資料がほとんど無いが、今回の結果からクリの木材が燃料材などに利用された可能性がある。また、食糧として重要な種類であることを考慮すれば、果実も食糧として利用された可能性がある。

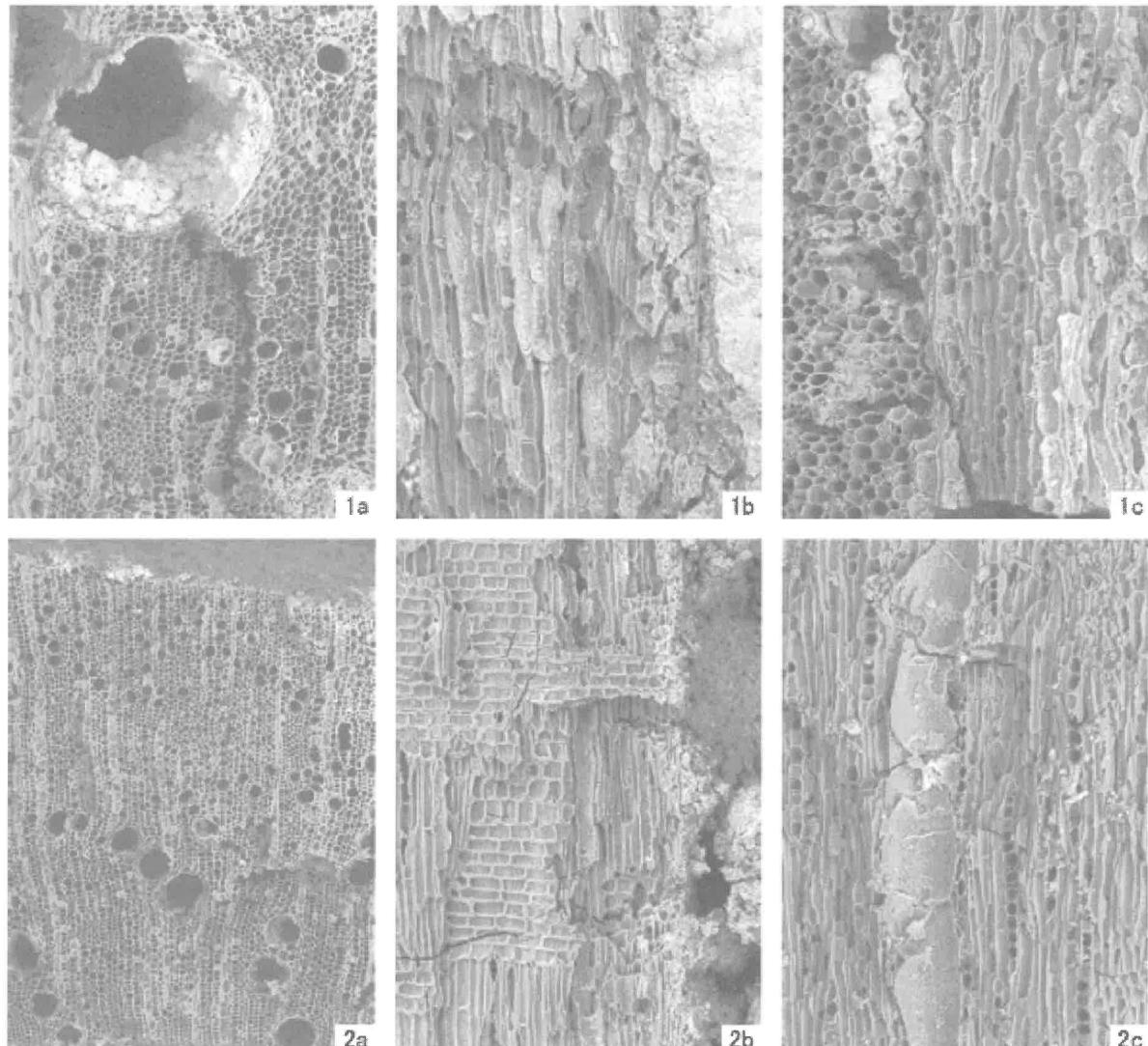
一方、西側遺跡の1005SBから出土した炭化材は、上記の炉穴出土炭化材と同様に炭化していることから、何らかの用途に利用され、火を受けたことが推定されるが、用途の詳細は不明である。炭化材は、落葉広葉樹のコナラ節に同定された。コナラ節には、コナラ、ミズナラ、ナラガシワ、カシワの4種がある。低標高地では二次林の構成種として一般的であり、木材はいずれも重硬で強度が高い。コナラ節の果実も食用可能であり、利用されていた可能性があるが、クリと異なり、灰汁抜きを必要とする。

今回の結果から、遺跡周辺では、コナラ節やクリの生育する植生が見られ、その木材や果実が利用されていた可能性がある。本遺跡の花粉分析では、花粉化石が検出できなかったが、今回のような炭化材や炭化種実等の分析を進めることで、本地域で資料が少ない縄文時代早期における古植生や植物利用状況を明らかにできる可能性がある。

高橋 敦（パリノ・サーヴェイ株式会社）・遠部 慎（北海道大学埋蔵文化財調査室）

（引用文献）

- ・林 昭三（1991）『日本産木材 顕微鏡写真集』京都大学木質科学研究所.
- ・伊東隆夫（1995）「日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅰ」『木材研究・資料』31、pp.81-181、京都大学木質科学研究所
- ・伊東隆夫（1996）「日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅱ」『木材研究・資料』32、pp.66-176、京都大学木質科学研究所
- ・伊東隆夫（1997）「日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅲ」『木材研究・資料』33、pp.83-201、京都大学木質科学研究所
- ・伊東隆夫（1998）「日本産広葉樹材の解剖学的記載IV」『木材研究・資料』34、pp.30-166、京都大学木質科学研究所
- ・伊東隆夫（1999）「日本産広葉樹材の解剖学的記載V」『木材研究・資料』35、pp.47-216、京都大学木質科学研究所
- ・島地 謙・伊東 隆夫（1982）『図説木材組織』、地球社、176p.
- ・Wheeler E.A., Bass P. and Gasson P.E. (編) (1998)「広葉樹材の識別 IAWAによる光学顕微鏡的特徴リスト」『伊東 隆夫・藤井 智之・佐伯 浩（日本語版監修）』、海青社、122p. [Wheeler E.A., Bass P. and Gasson P.E. (1989) IAWA List of Microscopic Features for Hardwood Identification] .



1. コナラ属コナラ亜属コナラ節(NSG-1)
2. クリ(MGN-1)
a:木口,b:柾目,c:板目

200 μ m:a
200 μ m:b,c

写真3-1 眼鏡下池北遺跡・西側遺跡の炭化材

6. 小 結

今回の発掘調査では、前年度まで継続して行われてきた眼鏡下池北遺跡の調査成果同様、縄文時代早期前葉に営まれた炉穴や集石遺構が検出された。

当遺跡に於ける過去の調査では、縄文時代早期の堅穴式建物が6棟検出されており、炉穴については100基前後が確認されている。今回の調査範囲では堅穴式建物は検出されなかったが、炉穴と集石炉はその残欠も含めて13基を検出した。

炉穴の構造や形態は既にいくつかの分類案が出されているが、九州型・東海型・関東型の3分類のほか、純粹に構造から抽出されたものもある。当遺跡で過去に発見された炉穴の場合、九州型13%・東海型7.8%・関東型50.6%という数値が出されている。(岩瀬2008) 数値上では関東型が優越するが、多様な形態のなかにはこれらの分類に収まらないものがあり、また、近年東三河から遠江地域で急激に炉穴の発見例が増加したことなどから、地域的特徴をより抽出できるような分類案の提示が必要であろう。

眼鏡下池北遺跡における炉穴の分布状況を見てみると、ほぼ東西に流れる眼鏡川によって形成された小規模な段丘縁辺、標高約18m付近の東西300m以上の範囲に広く展開する傾向がみられる。居住環境としては、眼鏡川の水流を容易に得られることや、日当たりの良い南向きの緩斜面であること、また大河川である豊川にも近く、指呼の距離でその異貌を誇示する石巻山山麓は良好な狩り場であったと考えられることなどから、理想的な居住条件を備えていたのかもしれない。

一般に炉穴は群集する傾向がみられ、しばしば住居址などがまったく検出されないこともあるが、眼鏡下池北遺跡では今回の調査区のすぐ東側に隣接する第3次発掘調査区の周辺に複数の住居址が存在することなどから、集落の中心であった可能性もある。

炉穴の分布に限れば、今回の調査区より更に西側にも広がっている可能性が高く、小規模な集落ながら河川北岸の段丘面に細長く展開する独特の構造が解明されつつある。

今回出土した縄文土器はごく少量であったが、押型文土器や撚糸文土器は早期前葉の大川式萩平型期にほぼ限られている。また、石器類は剥片のほか石皿や磨石などの生活道具を中心で、石鏃などの狩猟具がまったく見られないのが特徴である。

また、炉穴と集石炉の関係であるが、今回の事例でも、炉穴廃棄後の窪みを利用して集石炉が営まれたものと、集石炉として単独で営まれたことが推定されるものが同一の検出面から発見された。両者の先後関係を唱える説もあるが、早期前葉の同一土器型式範疇においては同時に存在していたと考えることが妥当であろう。

第1次発掘調査でも行われた放射性炭素年代測定で得られた結果は、9400yrBP前後にはほぼ集中しているが、今回のデータは9500yrBP前後と、若干古い数値が得られており、当遺跡における炉穴の形成が今回の調査地点周辺から始まったことを示唆するものかもしれない。

炉穴や集石炉の他に、注目すべき遺構として017SXがある。検出状況から石皿の埋納遺構である可能性を指摘できるが、埋納された状況からは呪術的な儀式の片鱗を見取することもできる。現時点においては同様の類例に乏しい遺構ではあるが、集落構造を考える上でも鍵になる重要遺構である可能

性が高い。

縄文時代以外の時期としては、弥生時代の遺構や遺物はみられず、古代後半の土器が数片みられるのみであり、実態は不明である。

中世以降としては、江戸時代後期の遺構群がA地区のみに集中するものの、重複する柱穴群や排水溝と考えられる溝のみの検出であり、建築物または集落の中心は調査範囲の東側に広がっていたことが推測される程度である。このような地山を深く掘削した柱穴などはB地区には見られず、ただ搅乱から概期の遺物が断片的に出土するのみであることなどから、このような状況は例えば屋敷（A地区側）と畠地（B地区側）といったような明確な区画を以て土地が利用されていたことを物語っているのかもしれない。

（参考文献）

- ・岩瀬彰利（2008）『眼鏡下池北遺跡－牛川西部土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書－』豊橋市埋蔵文化財発掘調査報告書第96集、豊橋市教育委員会
- ・岩原剛（2009）「眼鏡下池北遺跡①・②」『洗島遺跡（Ⅱ）・西側遺跡（Ⅳ）・眼鏡下池北遺跡（Ⅱ）・中郷西遺跡（Ⅱ）－牛川西部土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財調査報告書－』豊橋市埋蔵文化財調査報告書第107集、pp.62-74、豊橋市教育委員会
- ・小浜学（2003）「煙道付炉穴及び炉穴に関する一考察」『関西縄文時代の集落・墓地と生業』関西縄文論集1、pp.149-168、関西縄文文化研究会
- ・筒井京（2006）「炉穴考 東海地方における炉穴の分布と形態研究－静岡県を中心として－」『研究紀要』第12号、pp.13-24、（財）静岡県埋蔵文化財調査研究所
- ・矢野健一（1993）「押型文土器の起源と変遷－いわゆるネガティブな楕円文を有する押型文土器群再検討－」『考古学雑誌』第78巻第4号、日本考古学会
- ・矢野健一（2008）「押型文系土器」『総覧縄文土器』pp.154-161、アムス・プロモーション